

研修みずれわ

創立50周年特別記念号

これまでの **50th** これからの
Anniversary

Vol. **56** 2023



地方共同法人

日本下水道事業団

Japan Sewage Works Agency

研修センター

Contents



写真：日本下水道事業団研修センター新寮室棟

巻頭言	森岡 泰裕	日本下水道事業団理事長	1
50周年を迎えて ～研修事業のこれから～	渡辺 志津男	日本下水道事業団理事	2
withコロナ時代の研修			
～研修センターは全力で研修を実施します～	水津 英則	日本下水道事業団研修センター所長	3
昭和・平成・令和の歩み	橋本 康弘	日本下水道事業団研修センター研修企画課長	4
(祝)研修業務開始50周年を迎える思い	松原 誠	国土交通省水管理・国土保全局下水道部長	5
	菅原 文仁	埼玉県戸田市長	6
	寺澤 薫	宮城県七ヶ浜町長	8
	伊田 恒弘	埼玉県下水道局長	9
	長沼 輝伸	岩手県県土整備部下水環境課下水事業担当課長	10
	竹廣 喜一郎	福岡県福岡市財政局理事	12
	鎗田 篤治	千葉県千葉市建設局下水道施設部長	14
	大河原 勇	埼玉県川口市都市整備部長	15
		17
JS研修業務運営座談会			
～創立50周年を迎え	【出席者】 大宮司 綾	宮城県松島町会計課次長	
さらに高まるJS研修の価値～	西村 隆博	熊本県熊本市上下水道局計画整備部計画調整課課長補佐	
	柏瀬 保夫	(元)栃木県足利市上下水道部下水道課主幹	
	片柳 栄	(元)栃木県佐野市市民生活部長	
	岡本 久年	(元)埼玉県蓮田市上下水道部下水道課長	
	梅川 誠	埼玉県新座市インフラ整備部下水道課長	
	渡邊 良彦	日本下水道事業団研修センター特任教授	
	【司会】 橋本 康弘	日本下水道事業団研修センター研修企画課長	
	【事務局】 三浦 英和	日本下水道事業団研修センター研修企画課長代理	
50年関係者のあゆみ			
～研修部での思い出など～	渡邊 克宏	(元)兵庫県尼崎市下水道部長・研修部助教授	28
特別講義体験記	大宮司 綾	宮城県松島町会計課次長	32
JS50周年記念植樹報告		34
研修センター歴代幹部職員、教授等		36
新寮室棟の施設紹介		38
日本下水道事業団研修センターの新型コロナウイルス感染拡大予防対策について		40
令和5年度 戸田研修(対面集合)実施計画		42
研修センターの歩み		46
研修を支えるスタッフ・研修業務にご協力いただいている皆様		48
編集後記		巻末

巻頭言

50周年を迎えた研修事業

数多くの研修生の思い出とともに

日本下水道事業団

理事長 森岡 泰裕



日本下水道事業団（JS）は、2022（令和4）年11月に創立50周年を迎えました。1972（昭和47）年11月に「下水道事業センター」として発足し、「日本下水道事業団」への改組、地方共同法人化等を経て現在に至っています。研修事業も、JSが発足した1972年度からスタートしており、同じく50周年を迎えました。この間、受講した全国各地の研修生は8万人を超えています。日本の下水道整備に、人材確保という側面から少なからず貢献ができたことを誇り

に思うとともに、これまで受講いただいた研修生及び派遣団体の方々、講師の方々をはじめ多くの関係する皆様のご支援とご尽力に、この場をお借りして心から感謝申し上げます。下水道事業センターは、遅れていた日本の下水道整備を緊急に進めるために、下水道の事業主体である地方公共団体における下水道技術者不足を補完するとともに、育成を実施する機関として設立されました。研修事業はJS設立時から主たる業務として重要視されていたこととなります。当

初、1972年度の第1回、第2回の研修は他機関の教室をお借りして実施しましたが、その後、荒川左岸南部流域下水道荒川処理センターの敷地内にプレハブの研修宿泊施設を建設し、全寮制による研修を実施することとなりました。しかし、この施設には教室が1つしかなく、真夏には猛暑で多くの研修生が苦勞されたと聞いています。1975年3月には、待望の試験研修本館（現在の管理本館）が建設されました。寮室が二段ベッドの時代、8人部屋の時代などありましたが、

地方公共団体の皆様にお会いすると、JSの研修で学んだ実学に加え、一緒にこころした部屋で生活した研修生とのネットワークを構築できたことが特に有意義だったという感想を数多くお聞きます。なお、JS創立50周年となる今年度当初からは新寮室棟が運用を開始し、研修生は個室に宿泊できるようなるなど研修環境は格段に向上しています。

ことを目指しています。この中でも研修事業は、下水道プラットフォームとして地方公共団体職員の知見の蓄積や人材育成のため、時代や社会の要請により変化する課題や地方公共団体のニーズに対応する研修メニューを取り入れ、地方公共団体職員や民間技術者の育成支援・技術継承に努めることとしています。

日本の下水道普及率が上昇し、維持管理においては大半が民間委託されていること等もあり、地方公共団体の下水道担当職員が減少する傾向にあります。しかしながら、下水道事業を健全な形で持続していくためには、先輩たちの技術を継承し発展させる職員を育成し続けることが不可欠です。そうしたご要望にお応えできるように、JSは今後とも一丸となって努力してまいります。引き続き皆様方のご支援・ご指導をよろしくお願いいたします。

50周年を迎えて 研修事業のこれから

日本下水道事業団

理事 渡辺 志津男



日本下水道事業団（JS）は設立時の1972年度から研修事業を実施しており、今年度で50周年を迎えました。この間、受講いただいた研修生は8万人を超えており、研修生の皆さまをはじめ、派遣団体ならびに講師の皆さま、研修事業の関係者など、多くの皆様のご支援、ご尽力に心から感謝申し上げます。

ご承知のとおり、新型コロナウイルスが猛威を振るった2020、2021年度は多くの研修を中止せざるを得ませんでした。そのような中、いかにして研修を実施するかということ

で、JS研修センターでは初めてオンラインによる研修に取組みました。当初は資料の見せ方から話すタイミングまで、講師はかなり苦労していました。今ではかなり慣れてきたように、わかりやすい研修を提供できるようになっていきます。このオンライン研修は、経営に関する研修を中心に展開し、ライブ中継のほかオンデマンド研修も実施するなど、より研修を受講しやすいようにしております。オンライン研修の実施によって、従来、研修セ

ンター（戸田）まで来ることができなかった皆さんの受講も可能になり、結果として新たな層を取り込むことができました。

こうした新たな研修手法にも取り組んでおりますが、やはりJSの研修は座学だけではなく演習、実習に大きな特徴があり、それがJS研修の強みでもあります。このため、従来の集合研修と組み合わせて実施し、研修生同士のネットワークを構築していただくことも大きな研修成果の一つと考えております。

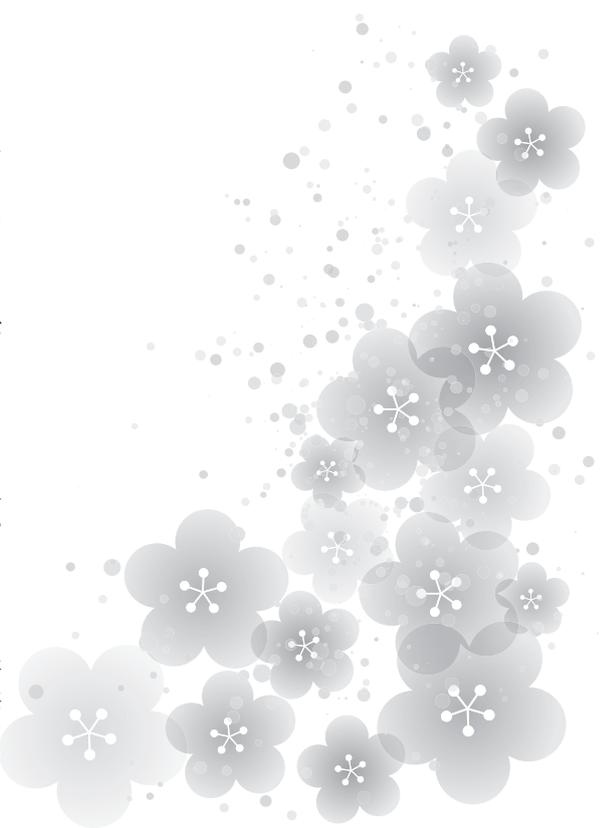
2022年度は変わらず

コロナ禍ではありますが、行動制限がかかっていることもあり、全ての集合研修を開講しております。さらに研修生のプライバシーを考慮しながら、研修生同士の交流を可能にする新寮室棟が今年度から運用を開始いたしました。ここには、研修生が共有して使用する学習室や開放的な談話室などがあり、研修生の交流がより効果的に実現できる施設となっております。現在は研修生にご協力いただき、コロナ感染防止を図りつつ、実のある交流をお願

いしていただいております。

これからのJS研修は、第6次中期経営計画において研修事業が担う「下水道イノベーター」としての役割を果たすため、集合研修とオンライン研修を併用しながら、さらに魅力的なものになるよう皆様からのご意見を踏まえ、新たな工夫も取り入れてまいります。

今後とも地方公共団体や民間企業の技術者の育成と技術継承などに向けて、全力で取り組んでまいりますので、引き続き皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。



「新型コロナウイルス時代の研修」研修センターは全力で研修を実施します

日本下水道事業団研修センター

所長 水津 英則



日本下水道事業団（ＪＳ）が研修事業を始めてから今年度で50周年を迎えます。この間、受講いただいた研修生は8万人を超えています。これまで受講された研修生をはじめ、ＪＳの研修事業に関係したすべての皆様に心より感謝申し上げます。

さて、私は2020年4月に現職に着任いたしました。その時はすでに新型コロナウイルス感染症が流行しており、2020、2021年度は多くの研修が中止になりました。研修事業50周年でこれだけの研修を中止にした

例は当然ありません。それでも研修の受講を希望される方がいる以上、コロナ禍の中でどのように研修を提供できるかが我々の大きな課題となりました。

2020年度は、行動制限がかからなかった期間のみ研修を開催いたしました。まだコロナがかなり脅威に思われておりましたので、いかに安全に受講いただくかについて研修センター内で議論し、感染防止のための対策を検討するとともに、万が一研修生が罹患した場合について保健所に相談してマニュアルを作るなど、集合研修の提供方

法について議論を重ねて、研修を実施していきました。

2021年度も同様に行動制限のかからなかった期間のみ集合研修を開催いたしました。新たな研修の提供として、オンライン研修を一部実施することとなりました。研修センターの研修は、実習、演習を中心にするものが多いことから、計画設計、経営を中心にオンライン化しましたが、スタジオの作成、事前の資料送付と接続チェック、ライブ中の切断に備えた職員の待機、講師との質疑応答手法の検討など、集合研修に

比べて職員の負荷が大きく、いかにこれらを軽減するかが課題となりました。こうした負荷は派遣職員による対応等を実施し、徐々に軽減されていきました。

2022年度は、行動制限がかかっていないことから、全ての研修を開講しています。現在、2019年度と比べて約7割ほどの研修生の申し込みがあります。私も着任後はじめて、多くの研修生が研修センター内を歩く姿を見ることができました。ただし、研修生が増えれば、当然コロナの感染確率も高くなります。実際、何名かの研修生がコロナに罹患されました。

現在、研修センターでは、研修生の皆様にご協力をいただきながら、感染防止策を講じていますが、発熱や喉の痛みがある場合は、すぐに管理本館の個室に移動していただくとともに病院を受診いただき、その後P

CR検査で陽性と判断された場合は、ホテル療養が可能になるまでの間、その個室にてお過ごしただいております。当然外出できませんので、その間の食事の提供や買い出しなどは研修センターの職員が夜間を通じて当番制で対応しています。万が一のことも含め、安心して研修にご参加いただければと思います。

コロナに罹患することはやむを得ないことですので、重要なのはその後の措置と考えております。同じ研修を受講する研修生全員が一緒に修了できるように、研修生の皆様にご協力いただきながら、お互いに配慮した交流を実施いただけるように、研修センターはこれから感染防止に努めながら、地方公共団体のニーズに合った研修を提供してまいります。研修へのご参加をぜひよろしく願ひ申し上げます。

昭和・平成・令和の歩み

日本下水道事業団研修センター 研修企画課長 橋本 康弘



なり下水道整備に邁進していた時代でした。

その下水道普及率を向上させるため、処理場や管きよの新設、増設すべく下水道事業に新たに取組を開始した地方公共団体の皆様を中心に戸田へお越し頂きました。

本年11月に事業団は創立50周年という記念すべき年を迎えました。ひとえに地方公共団体の研修生を始め、派遣団体の方々、講師の方々や研修業務関係者の皆様のご支援、ご協力のたまものと感謝申し上げます。

事業団が発足した昭和時代は、高度成長期で急激な都市化が進み、河川湖沼等の水質悪化が顕著となり、下水道普及率を向上させることを最重要課題として、国、地方公共団体が一体と

研修開始時の昭和48年初は他機関での間借りによる研修実施、その後、プレハブ校舎での研修実施としていたため、研修環境の整備と多くの研修生を受け入れるため、昭和49年度末に現在の管理本館棟を竣工し本格的に研修を開始しました。

しかし、現在の研修センターと比較しますと総合実習棟、新寮室棟等がまだ設置されておらず、管理本館棟内に研修室、食堂、浴室、

宿泊室を詰め込んでいたため、相当窮屈な状態での研修の実施でした。かくいうこの私も平成6年度に入社して最初の年に「管きよI」を受講させて頂きまして、3階の研修室で受講し、4階の浴室から富士山を見ていたことを思い出しますし、5階の8人部屋で数週間にわたり窮屈なりにも和気藹々と地方公共団体の皆様と每晚懇親を深めさせて頂きました。

その後、研修環境の充実とより多くの研修生の受け入れのため、研修室の室数増加、土・コンクリート実習や水質試験の環境を充実させるとともにOA実習室も完備した総合実習棟が平成7年に竣工し、管理本館棟3階以上を宿泊施設へ改修しました。

研修の環境が整ったこととで地方公共団体の下水道普及率向上へ向け職員の育成の場として研修センターを最大限にご活用頂き、平成になるまでに約1万5千人だった研修修了生も、平成30年には7万5千人にまでになりました。地方公共団体の努力による結果、下水道普及率は、平成30年度末で79%にも達したことは素晴らしいことと考えております。

令和の時代を迎え、下水道の役割も大きく変化し、新設・増設から維持管理や改築更新のストックマネジメントや経営戦略の時代へと進み、さらに急激な気候変動に起因する雨水対策やその急激な気候変動を抑制するための脱炭素化へとより広い責務を担うように

なって参りました。

その新たな下水道の役割を遂行するためにもさらなる知識の習得が必要となってきました。

JISの研修も新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、従来からの戸田や地方で実施する集合研修だけでなく、集合しなくても実施可能なZoomなどのリモート会議ツールを利用したオンライン研修の実施や、クラウドサービスを利用しいつでもどこでも受講が可能なオンデマンド研修を実施して時代のニーズに即した研修内容と研修スタイルに取り組んでおりますので、その知識習得の場、交流の場所としてJIS研修センターを今後ともご活用頂ければ幸いです。

(祝) 研修業務開始 50周年を迎える思い

日本下水道事業団 研修業務開始50周年に寄せて

国土交通省

水管理・国土保全局下水道部

部長 松原 誠



日本下水道事業団(ＪＳ)が創立50周年、そして研修業務開始50周年を迎えられましたことを心よりお喜び申し上げます。

いわゆる公害国会を経て全国的に下水道事業が展開されることとなっていく中、下水道事業への投資額の大幅な増大とあわせ、これを実際に執行していく地方公共団体の下水道技術職

員の充実が必要不可欠とい

うことで、昭和47年の下水道事業センターの設立時より研修業務は位置付けられており、それ以降、これまでの間、我が国の下水道技術者の確保、育成に大きな貢献をなされてきました。

現在に至るまで、いくつかの困難な壁がありました。1つは特殊法人改革によるＪＳに対する国の関与の縮減です。平成25年度にはＪＳに対する国の補助金が全廃され、研修事業は補助金によらない運営を行うこととなりました。もう1つはコロナ禍による影響で

す。予定していた研修が実施できなくなるなど、新たな対応が求められることとなりました。ＪＳ研修センターでは、このような困難な状況下でも様々な知恵と工夫で壁に立ち向かい、着実に研修を実施してこられました。これまでの研修継続に対する熱意と努力に対し、改めて敬意を表したいと思います。

さて、社会情勢の変化が著しい近年では、下水道事業をめぐる課題も多様化し、かつ人口減少や財政逼迫の影響もあって、下水道事業に従事する職員数も減少しています。このような中、下水道事業に精通した職員を確保し、円滑に事業を実施していただくためには、職員の能力の充実は欠かせないものであり、今の時代に適合した研修科目、効率的な研修手法、参加しやすい研修環境などが求められます。

研修科目の点からは、マ

ネジメントの時代に相応しい内容、激甚化する災害への対応、さらには事業を持続可能ならしめるための経営や官民連携などについて既に取り入れていただいています。今後とも地方公共団体のニーズを踏まえて、最新の課題について学ぶことができるようご配慮ください。国土交通省といたしましても講師派遣などを通じて協力していきたいと思っています。研修手法については、リモートとリアルの組み合わせで、より研修効果を高めていただきたいと思います。研修生が一同に会して意見を交わすことも大切です。戸田での人脈形成は、研修事業の大きな機能の1つとあってよいでしょう。

研修環境という点では、先ごろ新寮室棟が完成したとお聞きし、大きな期待を寄せているところであります。研修生の皆さんが快適に、またストレスなく研修にのぞめるということは重

要な視点です。その他、適切な研修受講料の設定や地方開催の研修など、引き続き多くの下水道職員が参加しやすい、また参加してよかったと思える研修環境の構築にご尽力いただきたい

と思います。

今後の下水道事業の浮沈のカギを握るのが、下水道担当職員の技術力だといっても過言ではないでしょう。これまでの半世紀にわたる活動の蓄積を基盤と

し、新たな時代においても、各方面からの変わらぬ期待に応えられる研修業務が実施されるよう、より一層のご活躍を期待しています。次の10年がさらなる飛躍の10年となることを心から祈

念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

創立50周年特別記念号 「研修みずのわ」の発刊に寄せて

埼玉県戸田市

市長 菅原 文仁



につつまして、心からお慶び申し上げます。

また、1972（昭和47）年の創立以来、長きにわたる、下水道事業の推進役を担われ、全国における下水道の普及促進による都市の健全な発展、公衆衛生の向上に貢献されましたこと、その多大なご功績に深く敬意を表します。

創立50周年にあたる本年4月には、本市に立地をいたします研修センターに新寮室棟が完成し、研修環境の向上を図られるなど、これからの下水道事業を担う職員に対して、更なるサポートをいただいているところです。

本市では、これまで数多くの職員をJ Sの研修に参加させていただき、講義や実習を通して広範な専門知識や技術を習得するなど、人材育成の貴重な機会となっており、今年度も、新たに下水道事業に携わる職員を実施設計コースに派遣させていただきました。

派遣職員からは、新寮室棟での新しく快適な環境の中、下水道工事の設計に関する知識や知見を習得し、今後の業務に有用で有意義な研修であったと聞いており、下水道職員の育成において期待されるJ Sの役割の重要性を改めて感じたところです。

◆今後の下水道事業

近年、国内における下水道の整備が進み、下水道事業の中心は、新設から維持管理の時代へと構造的に大きく変化しており、人口の減少と施設の老朽化、国や地方公共団体の財政難、技術者の恒常的な不足など、下水道事業を取り巻く環境は厳しいものとなってきております。

また、毎年のように水害や地震などの自然災害が

◆はじめに

日本下水道事業団（以下「J S」と表記させていた

だきます。）の創立50周年



荒川水循環センター上部公園



彩湖・道満グリーンパーク

頻発し、2011（平成23）年の東日本大震災や2019（令和元）年の台風19号などにより、多くの人的・物的被害が発生し、下水道施設も大きく被災するなど、防災減災、インフラ強靱化の必要性がますます高まってきております。

下水道が果たしている汚水処理や雨水排水は、今や国民生活と社会経済活動にとっての必要不可欠な社会的インフラであり、下水道サービスを持続的なものとし、その水準を向上させていくことは、下水道事業に関わる者すべての使命であると言えます。

J Sでは、下水道管理者である地方公共団体から、下水道施設に係る設計や建設などの事業を受託し、その実施を担う立場において、地域住民からのニーズに的確に対応した高水準のサービスを持続的に提供できる体制を築き、事業の安全・安心な施工に努めてい

ただいているところです。

本市では、道路冠水などの被害が多発している市中心部の浸水対策として、昨年度、J Sとの間に雨水貯留管の実施設設計及び建設工事を委託する協定を締結し、令和6年度末の完成を目標に、現在、道路の地下に内径6m、延長920m、貯留量26000m³の雨水貯留管整備事業を進めているところであり、そのご尽力に対し、この場をお借りしてお礼申し上げます。

◆おわりに

今日、地方公共団体では、暮らし、防災、環境等の幅広い行政分野において、住民からの視点に立った情報発信が望まれています。

本市でも、厳しい財政状況下における効率的な下水道事業の推進について、広く市民の理解を得ることが重要であると認識しており、その中で、J Sの役割や本市下水道事業に対する

ご支援の状況について、積極的に発信してまいりたいと考えております。

下水道事業が、普及促進の時代から本格的な維持管理の時代へと変わり、施設の老朽化対策が全国的な課題となっている中、J Sが保有する50年間にわたり蓄積されてきた技術力や人材力は、それらの解決に資する大きな財産となっております。

このような貴重な財産を築き上げてこられたことは、歴代の理事長をはじめ役員並びに会員の皆様方のご尽力の賜物であり、深く敬意を表するところであります。

結びに、J Sの益々のご発展を心からご祈念申し上げますとともに、本市をはじめとした全国の下水道管理者に対する下水道事業の発展及び推進のためのご支援に改めて感謝を申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

人がつなぐ「温故知新」 (祝) 研修業務開始50年を迎える思い

宮城県七ヶ浜町

町 長 寺澤 薫



はじめに、日本下水道事業団の研修業務50周年を迎えられ、全国の研修生OBを代表して心からお祝いを申し上げます。

50年というここに至るまでの道のりは、職員の皆さんはじめ、講師陣、関係各位のあくなき探求心とたゆまぬ努力の賜物でございます。

まさに、「温故知新」の言葉にあるように、歴史を

繋ぎ、人を紡ぎ、未来を予測し考察するといった一貫した理念のもとに今日があることを忘れてはならないと思います。

今、下水道事業は、公会計化をはじめ、情報技術によるデジタル化への改革は目覚ましく、ICT化、グローバル化など、大きな変革の渦中にあります。

さらに、長期化する新型コロナウイルス対応では、研修業務は、リモート対応やオンラインによる研修といった研修形態も大きく様変わりしたものとなっていくでしょう。

そのような社会の流れ

は、人材を育てる面においても変革が求められることと思います。私は、今後、デジタル化への進展によって、多様なスキルを持つ人材が求められる社会に変わると思っています。

これまでのような、大学での「文系」や「理系」に分けた人材登用だけではなく、デジタル化によって技術の平準化が進み、その壁が取り払われ、これから求められる人材は、技術力だけではない多様な視点を持ち、柔軟で創造性をも兼ね備えた多次的思考ができる人材と言えるでしょう。

事業団では、これまで実

践を踏まえた研修内容のもと、第一線で活躍できる人材の育成に傾注してきました。講師陣の真摯な対応と厳選された講義科目やきめ細やかな研修内容の配慮のもとで進められてきたことは、研修生、誰もが感じております。

究極は、モノづくりがあつてこそ、そこにデジタル技術が活用できるので。こういったアナログの現場力とデジタル技術とコラボできるバランス感覚の取れた人材の育成が急務であると考えます。

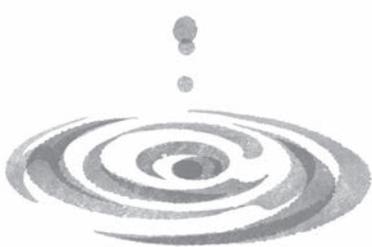
これからの50年を考えるとき、より高度で持続可能な社会の実現に向け、下水道事業団の果たす役割はますます重要となっていくでしょう。

特に近年は、気候変動による自然災害が多発し、豪雨災害が激甚化するなど、住民生活を脅かし、予断を許さない状況が続いております。

このような時代だからこそ、これまで蓄積された事業団の50年にわたる経験値と全国に広がる下水道人のネットワークは、新たな時代を切り開く貴重な財産になると確信しております。

これからの50年、これまで下水道事業団研修センターが培ってきた人とひととのつながりを大切にし、技術の伝承や英知を結集して、次の世代にしっかりと引き継いで行くことを願っております。

私もアナログ世代の一人ですが、今も薫陶を受けた渡邊良彦教授(当時)や先生方の助言や指導は、様々な局面で思考するうえで大きな糧となっております。



お馴染みの「研修みずのわ」で掲載される「宮山福会」を通じたその絆は、現在も絶えることなく、同じ時代を生きる仲間との交流は、年齢と共に円熟味を増

し、心ゆたかにしてくれるかけがえのないひとときとなっております。
人がつなぐ「温故知新」、下水道事業団の皆さんには、世界に誇る日本下水道

技術を育成する羅針盤として、さらに50年、新たな未来に向かって歩んで行かれることを心からご祈念してお祝いのおいさつといたします。

共に戸田市で半世紀、そして未来へ

埼玉県下水道局

局長 伊田 恒弘



成に御尽力されておられることに対し、改めて感謝申し上げます。

現在の下水道処理人口普及率は82.9パーセントで行政人口約738万人対し、約612万人が下水道

戸田市の日本下水道事業団研修センターにお越しになつた皆様は御存知かと思

このうち、埼玉県の流域下水道は荒川左岸南部流域下水道を始め、現在8流域

隣には、埼玉県が管理運営します荒川左岸南部流域下水道荒川水循環セン

ター（旧名称：荒川処理センター）がございます。

埼玉県の令和4年3月末

実は、荒川水循環センターも令和4年10月に供用

開始50周年を迎えました。1967年に8市による一部事務組合で事業認可を取

得して事業着手し、その後埼玉県が初の県内流域下水道として引継ぎ、1972

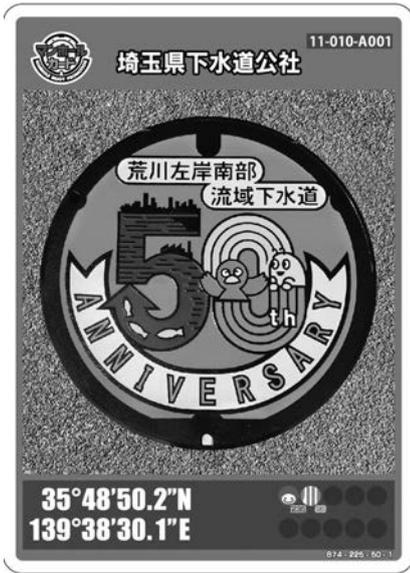
年10月に供用開始となりました。令和4年3月末現在では、市町村合併に伴い5

市となり約198万人と事業場の汚水を処理し、水処理施設の規模は、流域下水道で全国1位となっております。現在、施設の耐震化を進めるため、沈砂池・ポンプ棟の再構築事業を実施しております。

本県と日本下水道事業団研修センターに関わるエピソードをいくつかが御披露さ



寺子屋のあった場所に沈砂池・ポンプ棟・管理棟を再構築している様子



せていただきます。御紹介した再構築事業用地は、研修センターが荒川水循環センター内で昭和48年に研修を始めた当初にプレハブ棟があった場所です。このプレハブ棟は、寺子屋とも呼ばれていたそうです。このプレハブ棟と試験研修本館との間には旧堤があり、雨が降れば泥濘に足を取られないよう通ったそうです。昭和50年頃、試験研修本館に近い処理場内の建設予定地では、レクレーションとして研修生同士でソフトボール大会などに活用されていた時もあったそうです。また、昭和60年度から

平成14年度の18年と平成21年度から平成28年度の8年の計26年間、教員として県職員を13名派遣するなど、研修生とともに、職員の成長の機会をいただきました。さらに、今年は、日本下水道事業団創立50周年記念事業として行われた広報用アイコンを用いたマンホール蓋が、本県の流域下水道に設置されており、マンホールカードも発行されています。さて、日本下水道事業団研修センターは、日本の下水道の発展に欠かすことのできない人材育成を長年に

わたって行い、これまで8万人を超える研修生を輩出しておられます。歴代職員の皆様が常に真摯な姿勢で職務に取り組んでこられた賜物と敬意を表します。また、この歴史ある研修センターに人材育成の要となる新寮室棟が令和4年4月に完成し、完成式典には、地元戸田市とともに参列させていただきます。すばらしい環境とともに、より充実した研修など、ますます躍進されることと存じます。研修における人材育成は、基礎的なことに加え、本格的なデジタル社会への移行、変化と多様化への対応などに向けて、その役割はますます重要です。研修センターにおかれましては、新型コロナの感染対策なども続きますが、教員、職員の皆様が一丸となられて、新たな飛躍を遂げられるものと確信しております。

日本下水道事業団創立50周年を迎え、心よりお慶び申し上げます。また、今回研修みずのわ(創立50周年特別記念号)



岩手県県土整備部下水環境課
下水事業担当課長 長沼 輝伸

への投稿の機会を与えていただいた渡邊特任教授に感謝申し上げます。私事ですが、下水道に関わって今年で21年目となり、今年4月から岩手県県土整備部下水環境課下水事業担当課長の任につき、県内の下水道等の汚水処理事業に係る計画調整等の業務や市町村との調整業務に携

祝 研修業務開始50周年を迎えて

埼玉県としては、埼玉県下水道公社とともに、隣接します荒川水循環センターでの実務研修や講師派遣などを通じて、今後とも未来につながるよう、共に歩んでまいります。結びに、日本下水道事業団研修センターの益々の御発展と関係者の皆様の御活躍を心から祈念申し上げます。

わっています。

私のJS研修受講歴は、平成10年度の管きよ設計Ⅱをはじめに処理場設計Ⅱなど、3回となります。当時は3週間みっちり研修生どうし寝食をともにし、見聞知識を広げるとともに研修生間のネットワークを作れたことは、仕事のみならず、交友関係の引き出しを大きく増やす機会となり、大きな財産となっていました。

JSの研修業務が50周年を迎えるということで、これまで8万人弱の研修生が全国各地の下水道事業の推進に寄与されてきていますし、私もそのうちの一人であることは灌漑深く、研修センターの関係者の皆様には重ねて御礼申し上げます。

ちなみに、50年前の1972年(昭和47年)の岩手県内の下水道はどうだったでしょうか？私は3歳でしたが、県内で下水道

事業を実施していたのは、県庁所在地の盛岡市、製鉄業で栄えた釜石市の2市だけです。それから遅れて、県は北上川上流流域下水道事業に1974年(昭和49

年)着手しています。このように50年前の県内のほとんどの地域では、雑排水は側溝に流し、トイレは汲み取り式のポットン便所がごく普通の生活様式となつて



岩手山

北上川上流流域下水道
都南浄化センター
1980(昭和55年)供用開始時

北上川

いました。しかし、昭和60年代から平成10年代には県民の下水道に対する要望熱意が高まって、各地で下水道事業が開始されたほか、農業・漁業集落排水、浄化槽と県内の污水处理事業は飛躍的に普及拡大されました。その結果、令和3年度末の岩手県の污水处理人口普及率は84.4%となり、全国平均には遅れているものの、着実に污水处理事業が進んでおり、10年概成を目指して最後のラストスパートの段階であると考えています。

この50年の歩みは諸先輩方の御苦労の歴史とともにあり、その先輩方や我々現役世代の職員は、JS研修センターで学んだことを業務に活かしてきた結果ではないかと思えます。

また、時代は令和に入り、污水处理施設の普及拡大が進む一方で、新たな課題が次々と降りかかっています。「人口減少、施設の

老朽化、浸水・耐震・耐水化対策、地球温暖化、DX、持続可能な経営・・・」と、我々は污水处理事業に対する社会の様々の要請に 대응していかななくてはなりません。これらの課題は施設や

地域の事情によって対応する必要があるので、自治体職員のスキル向上・研鑽が必要です。しかし、県内自治体の下水道に携わる職員は減少しており、特に技術系の職員がいなくともある中、これらの課題に対応していくことは困難な状況です。また、2011年3月の東日本大震災、平成28年台風10号及び令和元年東日本台風とこの10年で大災害を受けています。マンパワー不足は本県にとって大きな課題であり、これは全国的な課題であると考えます。

今こそ我々は若い人材の育成に力点をおく必要がありますし、JS研修センターには、今後もこのよう

(一社) 花巻市観光協会HPより



花巻南温泉郷 大沢温泉「築二百年を超える建物もある湯治場」



花巻名物 わんこそば
「おいしいおそばを堪能あれ! 100杯目指そう!」

な中小自治体にも寄り添った研修の充実をお願いしたいと思います。中小自治体は、職員が少ないことから研修により業務に支障が出ることや予算の制約により、研修受講を控えざるを得ないという声を聴くことがあります。例えば2、3日間の短期間の研修や地方での研修を開催は有効であると思いますし、さらにはもっとPRしてもよいので

はないかと考えます。一つ、女性専用の宿泊棟も完成したことは今後の研修に大きな役割を果たすと期待していますし、コロナ禍で開催されるようになったWEB研修も数多く実施されていることは、非常に心強いところではありますし、近いうちにメタバースを用いた研修も出てくることでしょう。しかし、私個人としては担当教授、講師及び研修

生がFace to Faceで研修空間の緊張感・人と人のふれあいを共有することは対面研修の一つの役割であり、今後も継続してほしいと考えています。今後、対面・WEB研修の長所短所が議論されてくると思いますが、研修生や講師の声を聞きながら、さらなる研修の充実を期待します。最後にありますが、本誌

この度は、日本下水道事業団研修センターの創立50周年にあたり、心よりお祝い申し上げます。また、こ



福岡県福岡市財政局
理事 竹廣 喜一郎

のような節目の折にお祝いを述べさせていただく機会をいただき、大変光栄に感じています。
福岡市は、周辺を海と山に囲まれ、都市機能がコンパクトにまとまった都市的魅力と豊かな自然環境が調和した住みやすい都市として高く評価されるとともに、人口も伸び続けており、

日本下水道事業団 研修センター研修業務開始 50周年に寄せて

発刊時は、2011年3月の東日本大震災から12年が経過していることと思えます。この紙面をお借りしてこれまでの復旧復興への御支援に感謝するとともに、

JS研修センターの皆様には、今後の安全・安心で持続可能な下水道の発展のため人材育成に大きく貢献し続けてほしいと願うところです。

現在の推計人口は163万人を超え、全国の政令都市の中で第5位となつていま

す。都心部においては、「天神ビックバン」、「博多コネクティッド」を推進し、建物の高さ制限の特例承認や福岡市独自の容積率緩和制度などを組み合わせ、耐震性が高く感染症にも対応したビルへの建替えを促進するなど、安全安心で、魅力あるまちづくりに取り組んでいます。

一方、都心部郊外の東部・西部の海沿いのエリアでは、「Fukuoka East & West Coastプロジェクト」により、豊かな自然環境と調和した道づくりなど、地域の観光振興や活性化を図っています。また、開園50周年を迎えた油山市民の森と油山牧場について、新たな魅力や賑わいを創出しながらリニューアルを進めています。このように、「人と環境

と都市活力の調和がとれたアジアのリーダー都市」を目指し成長を続ける福岡市でありますが、このまちづくりを支えているのが、道路や下水道の社会インフラであるといえます。そして、更にこの福岡市の下水道事業を長年にわたり支えていただいているのが、日本下水道事業団センターの研修です。

さて、この日本下水道事業団への研修に福岡市の職員が初めて参加させていたしたのは、昭和48年に遡りますが、その当時は約30%であった下水道人口普及率は、現在では99.7%に達するまでになりました。しかし、近年、下水道事業を取り巻く環境は厳しさを増しており、更新期を迎える施設の増加に加え、豪雨や地震など大規模な自然災害によるリスクが増大しています。このような状況の中、下水道サービスを安定的に継続するため、現

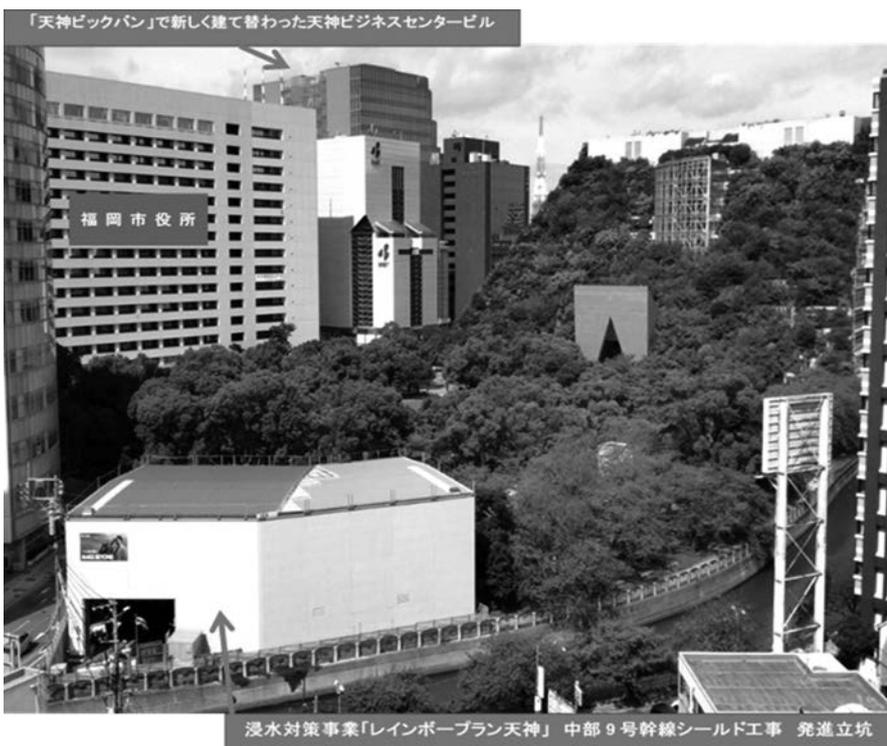
在では、改築更新・浸水対策・地震対策などの事業に重点的に取り組んでいきます。また、本市がこれまで培ってきた技術やノウハウを活かし、アジア等における国際貢献にも積極的に取り組んでいます。

そのため、福岡市では、污水管きよの新設工事は非常に少なく、業務を通じた技術の習得機会が限られてしまっています。また、設備の分野においても、更新工事への対応がメインとなっており、処理場などの新設の設備設計について経験できないことから、専門性の高い水質管理の分野なども含め、技術の継承が課題となっています。そのため、福岡市においては、日本下水道事業団による研修の持つ意義は非常に大きいものとなっており、技術の継承を確実に行うにあたり必要不可欠なものになっています。

日本下水道事業団の研修

には、福岡市からは、これまで延べ200名以上の職員が参加させていただいており、下水道事業に関する知識を学ばせていただくとともに、研修センターの講師の皆様や様々な自治体からの参加者との交流を通じて築いた関係も大変貴重な

財産となっています。また、日本下水道事業団を代表する名物講師である渡邊良彦先生には、これまで毎年（コロナの影響でやむを得ず中止した年を除き）福岡にお越しいただっており、先生との懇親会として「福岡みずのわ会」を



「天神ビックバン」で新しく建て替わった天神ビジネスセンタービル

浸水対策事業「レインボープラン天神」 中部9号幹線シールド工事 発進立坑

開催しています。当会には、福岡県、福岡市の研修OBをはじめ、近年では福岡県下の自治体からも参加者が増え、渡邊先生を中心に人と人との縁が広がる貴重な場となっています。

福岡市は、これからも下水道サービスを持続的に継続していくために、引き続き日本下水道事業団の研修をしっかり活用しながら、市民の生命や財産を守り、快適で安全な暮らしを支えていきたいと考えています。

結びに、末筆ではございますが、日本下水道事業団研修センターの益々のご発展と全国の研修生の皆様のご活躍ご健勝をご祈念申し上げます、お祝いの言葉とさせていただきます。



下水道事業団創立50周年を迎えて 「みずのわ」から、「ひとのわ」へ

千葉県千葉市建設局下水道施設部

部長 鎗田 篤治



この度は、日本下水道事業団の創立50周年にあたり、心よりお祝い申し上げます。

また、研修業務開始50周年の記念号「研修みずのわ」への寄稿の機会をいただき、大変光栄に存じます。

千葉市は、1921年(大正10年)千葉町の市制施行で誕生し、2021年(令和3年)1月に市制100周年を迎えました。また、

1992年(平成4年)には、全国で12番目の政令指定都市に移行し、2022年(令和4年)4月には、政令指定都市移行30周年を迎えました。この間、市街地再開発や道路・下水道などの都市インフラの整備に積極的に取り組んだ結果、人口は、84万人から97万人となり、政令指定都市の中で第12位、下水道普及率においては、68.2%から97.5%と29.3ポイント上昇し、同13番目となっております。

千葉市は、桓武天皇の血を引く坂東の豪族「千葉常重」が、平安時代後期の

治元(1126)年に現在の中央区亥鼻付近に本拠を移したことにより、本市の都市としての歴史が始まったと言われています。現在放映されている、話題の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」では、源頼朝が父と呼んだ常重の子「千葉常胤」が登場しています。千葉市では、この「千葉氏」を始め、国の特別史跡に指定された「加曾利貝塚」、世界最古の花と言われる「オオガハス」、日本一長い人工海浜である「海辺」の4つの地域資源を活用し、千葉市らしさを確立することを目指して様々な都市アイ

ンテイテイの取組みを推進しています。
私は、こうしたまちづくりを支えているのが、道路や下水道といった社会インフラであると考えます。特に、下水道事業は、土木工事から機械・電機設備を始めたとしたプラント建設に加え、水質調査業務など、多岐にわたる高い専門知識が必要であり、こうした人材育成を長年にわたり支えていただいているのが、日本下水道事業団研修センターです。

千葉市の職員が日本下水道事業団への研修に初めて参加させていただいたのは、昭和48年に遡り、これまでに、延べ450名以上もの職員が参加しており、下水道事業に関する多くの知識を学ばせていただくとともに、講師の皆様や様々な自治体からの参加者との交流を通じて築き上げた「ひとのわ」も大変貴重な財産となっています。

下水道は、近年、普及促進から維持管理の時代を迎え、新設から改築・更新に切り替わり、現場は新たな技術力を必要としています。

また、近年の異常気象に伴う豪雨や地震など大規模な自然災害によるリスクが増大しており、浸水対策・地震対策などの事業にも積極的に取り組んでいます。しかしながら、時代経過とともに、ベテラン職員の退職や業務の委託化が進み、建設工事はもとより、特に維持管理分野では技術の継承が大きな課題となっています。

こうしたなか、日本下水道事業団研修センターによる各種研修は、下水道技術を支える大変重要な役割を担って頂いているものと大変感謝しております。また、日本下水道事業団の研修には、生徒としての参加に加え、講師としても参加させていたいただいており、本市中堅職員の人材育成の場として

でも大きく役立っているところでは、さらにもう一つ欠かさない特別なコースがあります。それは、全国的に有名な渡邊特任教授の時間外授業です。渡邊先生は、毎回研修生を集めて交流の場「サロン渡邊」を開催して

いただいております、この「サロン渡邊」に参加した研修生の多くは、全国各地で「みずのわ会」会員として活躍し、各都市の下水道事業を牽引している人材と言っても過言ではないでしょう。何を隠そう、私も渡邊先生とのご縁は、研修ではなく、「千葉のみずのわ会」名誉会長である、土屋元下水道建設部長に連れられて参加した、「サロン渡邊」から始まっています。今は、コロナの影響でなかなか開催できない状況と思いますが、こうした機会から得た人の繋がりは「みずのわ」の名前の由来のように、小

さな輪から大きな「ひとのわ」となり、日本の下水道事業発展のために、大きな力となっています。

おわりに、日本下水道事業団研修センターの益々の発展と全国の下水道事業に携わる皆様方のご健勝とご

活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

創立50周年に寄せて

埼玉県川口市都市整備部

部長 大河原 勇



までの延べ272名の研修生を代表し、お礼申し上げます。

川口市は、南は東京都、西は研修センターのある戸田市に隣接する、研修生には馴染み深い人口60万人の中核市です。

本市では、「さらなる選ばれるまち」として発展することを目的に、多くの人に「住みたい」、「住み続けたい」と思われるよう魅力的で元気なまちづくりを目指し、市政に取り組んでい

ます。こうした中、近年、首都圏における「本当に住みやすい街大賞」では、川口が2年連続1位を受賞するなど常に上位にランキングされ、発展性、住環境、交通の利便性、コストパフォーマンス、教育・文化環境について高い評価をいただいている街でもあります。

さて、一昔前になります。私が若かりし頃の研修生だった時代の話をさせていただきますと、当時、「川口市は知らないけれど、西川口は知っている」という寮の同室の仲間がおりました。こんなことを思い出しながら、今回の寄稿にあたっては、当時の研修生とは切っても切れない関係だった西川口という街につ



いて、川口市の話より西川口の話を書きたいという「みずのわ」読者の期待にお応えして、川口駅の一つ隣の西川口駅周辺の話を書かせていただきます。

この西川口という街です
が、昭和から平成にかけては、歓楽街として関東のみならず全国的にも名を馳せ、事業団の研修生が夜になると繰り出してくれたおかげもあってか、活気あふれる大人の街として繁栄し

ておりました。多額のお小遣いを使った研修生も少なくはないでしょう。

研修生時代の私はどうだったかといえますと、昼間の研修内容はほぼ記憶に残っていませんが、研修時間外のことは未だによく覚えています。私が地元川口市職員ということもあって、当然のように夜の街の案内役となります。授業が終わると同志たちは挙ってバスで西川口に向かい、まず一次会は各自綿密な調査に基づき自由行動。そして二次会は居酒屋に集合し、自慢話及び反省話で盛り上がるといった良き思い出が蘇ります。

このように研修生を大いに楽しませてくれていた西川口ですが、駅周辺は平成16年に警察による風俗環境浄化重点推進地区の指定を受け、違法風俗店が一斉摘発されたことにより、一気に人が消え、それに伴い飲食店の数も減り、空き店舗



だらけの活気のない街となりました。

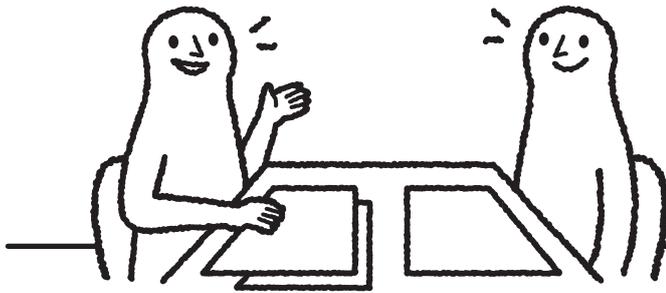
こうした中、空き店舗に集まってきたのは、中国系の方々で、中華料理店や中華食材店などが徐々に増え出し、現在では、中国語の看板ばかりが目立つ、西川口チャイナタウンと呼ばれる街へと変貌しています。

かつての西川口を知るものとすれば、街の浄化のため仕方ないとはいえ、かなり寂しく感じているところでもあります。

この度、かれこれ30年近くお付き合いいただいている渡邊先生から執筆依頼を

いただいた訳ですが、私に對して依頼をしてきたということは、きっとこんな寄稿を期待しているものと察し、たわいもない西川口の話を中心に書かせていただきましたことをお許しください。

最後に、新型コロナウイルス感染症が終息し、制限なくのびのびと研修生活を送れる日が少しでも早く来ることを願いますとともに、日本下水道事業団の益々のご発展と、関係職員の皆様のご健勝をご祈念しまして、創立50周年の祝辞とします。



JS研修業務 運営座談会

創立50周年を迎え さらに高まるJS研修の価値

【出席者】

- 大宮司 綾 宮城県松島町会計課次長
 西村 隆博 熊本県熊本市上下水道局計画整備部計画調整課課長補佐
 柏瀬 保夫 (元) 栃木県足利市上下水道部下水道課主幹
 片柳 栄 (元) 栃木県佐野市市民生活部長
 岡本 久年 (元) 埼玉県蓮田市上下水道部下水道課長
 梅川 誠 埼玉県新座市インフラ整備部下水道課長
 渡邊 良彦 日本下水道事業団研修センター特任教授

【司会】

- 橋本 康弘 日本下水道事業団研修センター研修企画課長

【事務局】

- 三浦 英和 日本下水道事業団研修センター研修企画課長代理

JS研修との関わり

橋本 日本下水道事業団50周年にあたって研修業務の座談会を企画させていただきました。本日お集まりいただいた皆さまは、昭和から令和までJS研修に受講生そして講師の立場で参加した経験がある方々です。JS研修センターが実施してきました研修について、また地方公共団体の立場として講師を派遣するメリット、今後の研修業務への期待などをお話し

ただければと思っております。はじめに自己紹介を兼ねまして、皆さまとJSの関わりについてお聞かせ下さい。

大宮司 宮城県松島町の大宮司と申します。今年の4月から会計課で勤務していますが、以前は水道経営の部門で6年ほど勤務していました。JS研修では平成16年と17年に経営コースで、決算と消費税、下水道使用料について受講しました。



橋本氏

西村 熊本市上下水道局の西村です。平成15年度に

下水道計画部門に異動して、現在まで約20年あまりになりませんが、16年度にJS研修の計画策定と計画の見直しを受講し、その後は雨水整備も受講しました。研修で得たものは、実務に活用させていただいています。

柏瀬 足利市OBの柏瀬です。平成7年度に下水道課に異動してすぐ、JS研修「管きよII」を受講しました。以来13年間、

定年退職まで下水道の仕事に従事しました。

片柳 佐野市OBの片柳です。私も昭和50年佐野市役所に入り、下水道課勤務を命じられました。以後13年間、昭和が終わるまで下水道から異動することはありませんでした。

昭和56年度にJS研修を初めて受講しました。確か工事監理というコースでしたが、30数人の全国の仲間と一緒に、4週間ともに学びました。何

人かの仲間とは今でもお付き合いをさせていただいております。

講師については、私が退職した年である平成23年に、渡邊先生からお引受けして以降、継続させていただいています。私にとっても若い人と対面し意見を交わすことが楽しみです。教壇に立っています。

岡本 蓮田市OBの岡本です。昭和51年4月に蓮田市役所に入り、最初に下水道からスタートし、昭

和の時代は下水道一本でいました。平成になってから他部署に異動しましたが、下水道に戻って3年ほど勤めて、また異動して、定年退職までの最後の10年は3度目の下水道勤務となりました。通算すると23〜24年間を下水道で過ごしました。

JS研修は昭和の時代に3回受講しました。最初に受けたのが、現在は私自身が講師を務めている「管きよI」でした。実施設計がメインで、4

週間にわたって色々大変なこともありましたが、3回受けた中で一番印象に残っています。その後、渡邊先生との出会いがあり、平成23年3月に蓮田市退職後に「講師に來い」と声をかけていただき、一生懸命やらせていただいております。

梅川 新座市下水道課の梅川です。私は民間の建設

コンサルタントを経て、平成16年度に新座市に入庁しました。全く下水道のいろはを知りませんでしたので、早速、JS研修に参加しまして、平成16年度は「管きよI」、その次の年に「管きよII」を受講しました。その後、渡邊先生からお話がありまして、講師を務めさせていただきますました。講師としての担当は入庁初年度に受講した「管きよI」で、私が受講生を送り出す立場になるとは、当時



大宮司氏



西村氏

は思っていないなかったの
で、感慨深いものがあり
ます。

入庁後8年間、下水道
課にいまして事業計画の
認可についても受講させ
ていただきました。その
おかげで認可の担当とし
て業務を成し遂げるこ
とができました。その後、
異動となり区画整理に移
り9年間は下水道から離
れていましたが、課長と
して下水道課に戻りまし
て2年目ですので、下水
道事業に計10年間携わっ
ています。これは本当に

J S 研修で下水道を教え
ていただいたことの賜物
だと思っています。引き
続きよろしくお願いいた
します。

研修生から見た J S 研修の意義

橋本 ありがとうございます

ました。J S 研修を開始し
ました昭和47年には普及
率が19%でしたが、昭和
62年度末には39%、平成
6年度末には51%まで伸
びました。このような急
激な普及率の向上には、
下水道技術者の育成が急
務でした。そこで、当研
修センターで実施してい
る研修が研修生から見

どのような研修効果や意
義があったか、ご自身の
経験を踏まえましてお話
しいただけますでしょうか。

大宮司 私は経営面で下水

道に携わりました。松島
町は単独公共下水道で供
用開始が平成3年、私は
平成14年度から下水道を
担当させていただきました
。町の規模も小さく、
経営担当も1人で、とに
かく受益者負担金から使
用料徴収、滞納整理、補
助金申請、起債の借入れ、
決算統計まで全部一人で
こなさなければならな
いのです。

大規模な市では使用料
は収納だけとか分業され
ていると思いますが、小
さな町なので全部一人
で。人もいないので教え

ていただく機会もありま
せん。そこで、正しい知
識をきちんとく学べるJ
S 研修を受講する必要を
実感しました。

当町の職員がJ S の経
営研修を受講した前例が
ありませんでしたので、
当時の課長に直談判しま
して、予算を確保してい
ただいて、平成16年度に
受講することができまし
た。本当に下水道の経営
というのはどういうもの
かを改めて勉強させてい
ただいたことは、業務の
中で教えてもらえる環境
の無い私にとってみれば
大きな意義がありまし
た。

私のように小さな市町
村で頑張っている方々に
は、組織が小さいほど1
週間も職場を離れること



柏瀬氏

は大変かもしれないかもしれませんが、ぜひJS研修を活用していただきたいと思えます。専門的な知識を得て、それを仕事に活かしていただいたら、ますます自分の仕事のスキルアップにもなります。JS研修を通じて、全国に同じように頑張っている仲間がいるということ知り、そこで得た仲間同士のつながりで、わからないことがあったら電話して「こういうことはどうしているの」と聞けるということも大きな助けになりました。単なる専門的知識の習得以上に、色々と得るものがあるということが、JS研修の大きなメリットだと感じました。

西村 私は下水道事業計画の計画に、携わりましたが、土木職ですので法律関係の知見が弱いこともあり、JS研修で事業認可について学ばせていただいたことが、非常に役に立ちました。地方自治法については市町村職員対象の外部研修の機会も多

柏瀬 私は昭和22年生まれで団塊の世代ですが、この世代が退職して10年以上経ちました。どこの市町村も土木関係の職員を募集しても来ないという今の時代、即戦力を要請

片柳 私は昭和50年に佐野市役所に入庁し、下水道課工務係を命ぜられました。その6年後にJS研修に参加し、4週間にわたって基本中の基本を学びました。下水道法をはじめ、関連法令も多く、そして幅広く極めれ

岡本 蓮田市が市になったのは今から49年前の昭和48年で、その3年後の51年4月に入庁したのですが、約3万人の人口規模で、市役所の組織体制も成熟しておらず、できたばかりの下水道課も5人体制でした。当然、誰も下水道のことはわかりませんので、JSで実施設計の研修を4週間にわたって受講しました。そこで初めて基礎を理解し、下水道の設計はこうやる、工事はこうやるといったことを学びまして、それがその後の自



片柳氏

とかを改めて学ばせていただいた契機になったのが、JS研修です。こうした経験を、後進の方々にも得て欲しいと思っています。

いのですが、下水道法や水質汚濁防止法といった下水道事業ならではのものは、やはりJS研修でしか学べないものであり、技術職である私たちにとっては非常には身になった部分がございます。

するという意味で、JS研修の意義はますます大きくなっていると思えます。自分自身の経験では、「管きよII」の研修を受けて市に戻り、研修で使った設計書を活用して、自分で推進工事の設計をしました。そして宿泊研修の中で他の研修生の方々とコミュニケーションで培った、全国の人たちとのつながりは得難いもので、会計検査受検にあたってのアドバイスなど事業の様々な点で協力していただきました。

ばかなり深いです。それがわかったのは退職してからですね。JS研修センターは、この50年間、しっかりと役割を果たしてきたわけですから、受講した私たちが、そこで得たものをどう活かすかが重要と常々思っております。

分の仕事に役立ったので
す。JS研修を通じて、
下水道技術者としての基
礎を培うことができた
今でも感じているところ
です。

梅川 新座市は昭和49年度
に下水道事業を開始し、
昭和50年代と平成初期の
2度の整備のピークを迎
え、その後は整備が落ち
着いて組織としては縮小
しました。下水道建設課
と下水道管理課の2課体
制が、私が入ってから下
水道課のみに縮小されま
した。技師の採用もなか
なか進まずに、私のよう
な中途技術者を採用して
いる現状です。

きたのです。つまり効率
的な人材育成に、このJ
S研修は非常に寄与して
いるのです。

技術者が不足する時代
を迎え、各自自治体で技師
を奪い合い、人材が不足
しています。そこで道路
など他分野の技術者を異
動で下水道に迎え、育て
ないといけないので、J
S研修は無くてはならな
いものとなっています。
現在も、JS研修「管きよ
I」「管きよII」に2人
を派遣しています。

橋本 では多くの研修生を
送り出した立場として、
渡邊先生からお願いしま
す。

渡邊 私は昭和、平成、令
和と通算36年間にわたり
研修業務に関わってきま
したが、出向期間中は企
画業務と演習教官との二
足の草鞋を履いて演習関
係の体系を整えました。
気苦労もございました
が、一生懸命取り組んで

いるうちに、この先も研
修業務を継続していきたく
いと決意した時期でもあ
りました。

ある都市の幹部より
「研修から帰ったあとの
目の輝きが違う」とのお
声をいただいたことが、
今日も励みになっている
ところです。

今後とも、研修内容の
充実と生活環境の改善に
努めてより良い研修の場
となるように努めていき
たいと考えております。

橋本 私は平成6年にJS
に入社しました。当時は
まさに普及拡大の時代で
JSの業務も建設が中心
でした。私の大学での専
攻は、下水汚泥の研究で
したので、JSに入って
まず担当したのは管きよ
や処理場の新設で、まさ
しくトンカチです。全然、
トンカチは大学で勉強し
ていなかったものですか
ら、やれ現場監督だ、実
施設計だ、構造計算だと



岡本氏

いっても全然わからな
いわけです。そこで早
速、JS研修の「管きよ
I」「処理場II」を受講
し、しばらく経って計画
設計についての研修も受
講しました。やはり設計
書の組み方からの段取り
を学んで、すぐに現場に
戻って研修で得た知見を
実践するといった、願っ
たり叶ったりのコースで
した。

平成6年当時、JSも
手書きで設計書を作って
いました。コンサルタン
ト業者から上がったきた
設計書を観ながら構造計
算をやつてといった具合
でしたが、翌年の平成7
年からコンピューターで
の積算となりましたの
で、手書き設計の最後を
経験したことになりました。
しかしシステムのみに
に任せると数値の誤入力
等で間違っても気づかな
いことが大野ですが、手
書き設計の感覚がある
と、そこに違和感を感じ
取って感覚的に間違いに
気づきますので、やはり
貴重な経験ができたなど
思っています。

私も地方公共団体の皆さんと一緒に研修を受けましたので、人のつながりを得ることができました。平成24、25年に新潟市に向かで行きましたが、研修で一緒にいた方に覚えていただいています、十何年ぶりに会っ

ても「ああ、橋本か」と親しく声をかけていただけるのがありがたかったですね。私も身をもってJS研修は、全国の下水道事業の底上げにもなりますし、横のつながりにもなると実感しています。

研修における課題

橋本 現在、JS研修は国からの補助金が廃止になり、研修受講料の値上げも行っています。また地方公共団体においては、技術職員の減少から長期間の研修派遣が非常に難しくなっているものがございます。このあたり、皆さんの見解をいただければと思います。

大宮司 私は事務職で経営コースを受講しました

が、これは基本的には1週間が、その中で学ぶ内容も充実していますので、1日の講義時間は長く5時まで講義が詰まっています、技術系の研修が4時頃に終わるのを羨ましく見ていたのを憶えています。

平成16年に受けた研修では、小さい子供と初めて1週間離れ離れになるという経験をしまし

た。ホームで子どもが泣くのを見ながら新幹線に乗ったことは今でも脳裏に残っています。JS研修で得るものは大きいのですが、それとトレードオフで家族と離れてすごさなければならぬというのを、躊躇される方も多いと思います。そこで、リモート講義などを活用し、その両立することも選べるようにするこ

とが、これからの時代は必要かなと思いついています。公務員は旅費を支出して公費で出していただけというところも多いと思うので、その必要性をきちんと説明することが必要ですね。私は最初、予算がないから行けないよと言われ、先に申し上げたように予算の確保からやらなければなりません。

西村 私が研修に来て驚いたことの一つに、宿泊施設の充実があります。JSが自前で研修生のための施設を用意しているのはいいなと思いました。

研修のグループディスカッションで知り合った他の都市の方々と、宿泊期間を通じて交流を深めるといふ経験が、コロナ禍の研修ではできなかったのは残念ですね。

また本市は上下水道局ですので、上水、下水の



梅川氏

んでした。上司の方の理解を得て、後押ししてもらえらるような、部署全体で応援してもらえらるような環境づくりが需要ですね。私は実経験として、外部で専門的なことを学ぶことは大事だと感じていますので、これからも後進の皆さんを送り出していけるような環境づくりをしていきたいと思っています。



渡邊氏

バランスの関係上、あまり下水道部署ばかり外部研修に行くというのも具合が悪いので、バランスをとりながら、上手くやっけていきたいと思っています。

柏瀬 平成7年頃は下水道普及率を上げることが最優先で、予算を心配することも無く、とにかく職員の仕事の養成のためJS研修を活用することに、周囲からはとやかく言われることはなく、何の懸念もありませんでした。

下水道事業は同じく道路下に埋設されている他のインフラに関係することや、道路占用、使用料徴収、住民対応など、多くの法律が関係するもので、下水道そのものの知識以外にも多くの勉強が必要で、私は住民対応の関係で、毎日のように裁判所に通った時期もあり、訴訟の関係も勉強しました。下水道は、まるで市町村の事業すべての縮小版のように、行政の仕事のさまざまな要素が集約されているのです。

本当にいいところに異動させてもらって良かった、楽しかったといえる時代でした。こうした私の経験を踏まえますと、今後の時代、危機管理を含めて即戦力となる人材はますます必要で、それを支えるJS研修の意義も大きくなっていると思います。

片柳 佐野市では昭和の時代は、JS研修に職員をある程度送り出していました。平成元年頃を境に、20年ほど受講生を送り出さなくなっていました。私は当時、下水道から離れていましたので、外部から「なぜ送らないのだろう」と考えていました。予算、研修費がネックなのか、上司や市の上層部の理解が無いのか、何が要因だろうと考えていました。平成18年に下水道に戻った際、何とか上層部に掛け合い、1人当たりの予算を

確保でき、研修生を出すことができました。渡邊先生はじめJSの方々にも市に来ていただくなど、JS研修の意義、必要性を市のトップにわかつてもらうような下ごしらえに務めました。

受講できる環境ができたとしても、受講生本人のやる気次第で変わってくると思います。JS研修で自己研鑽して、自治体に戻ってさらなる活動をしていくといった好循環を培ってほしいと思います。

岡本 私が蓮田市に入った昭和51年以降、しばらくは下水道も普及拡大の時代で、技術職を継続して採用していました。しかし平成に入ってから採用数を絞るようになり、蓮田市の採用試験は技術職も事務職も同じ土俵で点数を競い合う方式でしたので、どうしても点数が高い事務職ばかりの採用

となってしまう。そして、私が退職したあたりから技術職がいなくなり、中途採用で補うといったことをしています。このあたり、市として技術職を重要視しない傾向があったことも否めません。

やはり若い技術職を採用していか育ていかというのを、市町村側も真剣に考えていかねばならないと思います。技術職員は意外と事務のこともできますが、事務職員が技術の仕事も兼ねるのは簡単でないので、この認識を行政側でもっと重視することが大事だと、退職後に思っているところです。

梅川 私は入庁当時の課長が、JS研修に理解のある方で、行ってこいと後押ししていただいたおかげで、計3回も受講しました。私が令和3年度に下水道課長として戻り、

そして今年度は研修費用を増額しましたので、5人ほどJS研修でお世話になりたいと思っております。

研修センターも新寮室棟を建てるなど、受講生の生活環境改善の設備投資をしており、自信をもって研修生を送り出すことができます。またコロナ禍においてもリモート等による研修が行われました。簿記会計の知識が非常に必要な係もあることから、リモート研修を利用していただきました。

また当市は研修センターと同じ県内です。女性職員でお子さんがいる場合など、JSに相談させていただいた結果、通いで研修を受けたケースもあります。

研修期間が短くなり、計算の実習が少なくなっていると聞きしていま

すが、私は「管きょ」で渡邊先生に教えを受け、手書きで一つの設計書をつくって、かなり自信を持った覚えがありますので、期間の関係で内容を絞るにしても手を動かすことを忘れないようをお願いしたいです。

橋本 座学だけですと一方通行になってしまいますので、やはり講師の方とのキャッチボールが必要ですね。今までの伝統を活かしつつ、集合研修の良さを出していきたいと考えております。

渡邊 研修期間の話がありました。研修企画課では毎年、派遣団体へのアンケートを実施しております。期間短縮を望む声がありました。組織としては、その声にも耳を傾ける姿勢が大事です。現況は数多くの専攻が短縮されております。

しかし、私は一律に短

くすればよいと考えているわけではなく、内容に応じた適正な期間が必要と考えております。

あとは、受講料につい

講師の立場から

橋本 皆さんのお話しを聞きして、期待に応えられるような研修期間、カリキュラム、料金、これらのバランスが取れた研修をつくっていく必要があると、改めて実感しました。

続きまして、講師の派遣についてお聞きしたいと思えます。良い研修を実施していくためには、経験豊富な講師をいかに集め、実体験を踏まえた研修を実施していただくことが重要となります。派遣する団体側から

ですが、「安全・安心」を問いかけられている現状で、それを担っている分野であると考え、国策で人材育成に貢献し

ていくためにも、受講料を下げて受講しやすい環境づくりをJSに求められているのではないのでしょうか？

すると、なかなか講師を常に確保することは難しく、派遣依頼に応えられない場合もあるでしょう。

西村 熊本市では、年間5〜6人の職員を講師として派遣しています。30代ぐらいの職員に順番に講師の経験を積ませることで、途切れなくJSに派遣できますし、また本人のスキルアップにもなっています。

柏瀬 下水道工事の事故は死亡事故につながる事故があります。事故の責任

は監督員に因るところも大きいと思っております。監督員に毅然として意見を言えるような指導力がないと、やはり事故はなかなかないと思えます。事故は開削工事です。土留めをしない等の不注意によるものが多く、きちんと注意を払えば防ぐことができます。しかし、指導する立場の監督員がきちんと注意しないと事故が起こるのです。ですからJSの研修では、そうした意識も学べるようにしてほしいです。

片柳 教壇に立つ側として、JSには現役職員の講師とのコラボ、マッチングをうまくやっていたらいいと思いますね。

今の研修生は敏感です。で、私たちOB講師は、昔はこうだったという話。はできませんが、現在の新工法等については掘り下げて教えることはなかなかできません。現役職員の方がもっとスムーズに講師を務めることができるような配慮をしていたらいいと思います。

渡邊 以前は、実務者研修という視点から現役職員を講師として派遣していたの人的繋がりへの対応が前提でした。

しかし、研修が拡大していく中では、窓口を一本化して組織対組織での対応に移行せざるを得なくなり、今日に至っておりますが、地方自治体の職員数減少傾向の中で、講師を出しにくい状況に

なっていることも現実でした、そこで民間・OBの活用に至っているのが現状です。

梅川 講師として来る時には事前に勉強させていたで、本当に人を育てることだと実感したものです。ですので、新座市としても講師を出せないかという依頼をいただくたびに考えています

が、以前は下水道2課体制で40人だったものが現在18人ということを考えますと、講師として送り出すことができないのが非常に残念なところですね。

ただ研修生に現場を見せるということについてはタイミングが合えば、新座市も研修センターに近いので、ご協力させていただきたいと思っております。

渡邊 やはりJSが魅力ある研修を企画すれば研修生を呼び込むことができます。

ますが、講師の確保は別問題です。

研修講師体験も、資質向上に大いに役立つ認識をもって、講師の継承に努めていただいている都市も多く御座いますが、他の都市でも講師の継承伝承に努めていただきたいと切に願っております。

今後の研修業務への期待

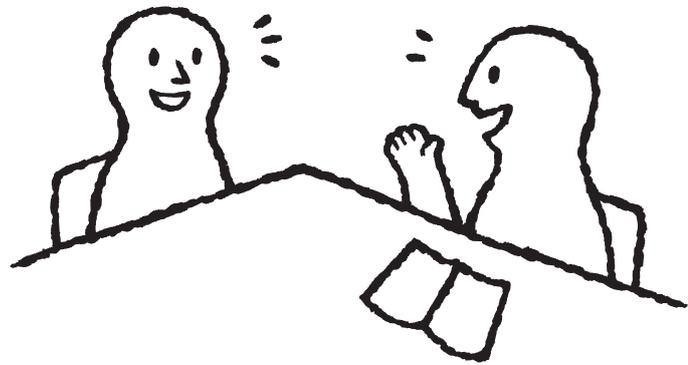
橋本 令和2、3年度、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で研修生の参加が減少してしまいました。

今年度はそのリバウンド効果なのか多くの研修生に参加いただいております、改めて研修センターは地方公共団体の皆さまにとっての重要なポジションにあると実感し、身が引き締まる思いで

す。今後の研修業務に対して、期待やご意見がありましたら一言いただけないでしょうか。

大宮司 建設から維持管理へシフトし、公営企業会計が適用されるなど、下水道事業を取り巻く環境の変化は大きいです。こうした変化に対応したことを学んでいかなければなりません。今後も、そ

の時々で学ばなくてはいけないことも変化していくと思いますが、そうした最新知見を市町村の課の中で得るのは結構大変なことです。専門的な知識を研修で得るとことは今後も引き続き必要です。ぜひ全国の下水道職員のスキルアップのための応援を、研修を通じて引き続きやっていただきた



いと思います。

私も下水道を離れて長いですが、また人事異動で下水道になる日も来るかもしれませんので、その際はまた研修センターにお世話になりたいですね。そして、研修生ネットワークというのが、輪のように大きくつながっていますので、こうした人のつながりも引き続き大事にしてほしいと思います。

片柳 昨年初当選した現佐野市長は、人材育成や技術職員の活用を打ち出しています。この背景には、令和元年10月の台風19号で、かつてない大災害に見舞われたことがあります。現市長は、当時の技術職員のありさまを見て、特に災害時には技術屋が一丸となって対応することに必要性を実感し、令和4年4月に技術センター部を創設しまし

た。

これは、市長の技術職への強い期待の表れだと思いますし、こうした市の技術職育成の一端をこのJS研修センターが担っている、私は思っています。私も引き続き、裏方として研修センターに協力できればと思います。

岡本 これからの職員減の時代、技術職は事務職の仕事もカバーすることも多くなると思います。経営の時代ですから、施設の更新にしても、全体的なマネジメントを考えた資金的な裏付けが必要となりますので。そこで、経営面等も含めて、総合的な知識が得られるような研修も設けていただければと思います。いろいろ組んでいていただきたいなと思っております。

柏瀬 市町村における技術

職員の不足は深刻です。足利市の技術職員の集まりの技術会ですが以前は100人ほどいたのが今では20〜30人です。技術会で研修なども行っていました。研修会そのものも開催できないくらい人数が少なくなりました。ですからJS研修センターへの期待はますます大きくなっています。

また足利市は災害がほとんど無いので、それに甘んじて佐野市のような危機感も育たないので。そこで、佐野市の技術センターの取組みが、他の市町村に良い影響を与えるような起爆剤になることを期待しています。

梅川 新座市では令和2年度に、下水道事業を特別会計から企業会計に一部適用ではあるのですが移行しました。今、令和3年度決算に向けて準備し

ているところです。企業会計移行後、2回目の決算ですが、最初は一般会計から支度金等を繰り入れて、安定経営に向けて努力しています。面整備から維持管理、改築更新に向けて時代が移り行く中で、今後は新規整備以上に多額の事業費がかかることが予想されます。ストックマネジメントの考え方に基つきコストを試算しているところなのですが、そのコストを経営戦略に位置付けますと、当然その先に下水道使用料の改定等を検討しなければならなくなるのです。

こうしたことを踏まえて、JSの研修業務には使用料の改定等の経営面、そして改築更新についての内容の拡充を望みます。これらはまだ経験が少ない自治体が多いです。そして気候変動によ

る豪雨の激甚化で、今まで被害がなかった地域も浸水するようになっていきますので、雨水の総合的な管理についても研修のニーズはあるでしょう。ぜひ持続可能な下水道の実現に向けて、JS研修の充実を期待いたします。

西村 熊本市も他都市同様に地震、豪雨などの防災や危機管理が課題となっており、これらに対応した研修のニーズも今後高まるでしょう。熊本市は政令市に移行後、県道、国道の管理など市職員の役割が増えましたので、道路グループも含めて土木職員が不足気味となっています。限られていた人員で対応するには、やはり危機管理を備えたスキルアップが必要で、下水道分野ではやはりJSから全国的な視点で指導をいただければと思っ

ています。

平成28年熊本地震から年月が経過し、災害対応を経験していない若手職員も増えました。災害経験の継承も重要で、局内の研修テーマの一つとなつていきます。

渡邊 当研修センターは、8万5000人の研修生を輩出してきましたが、研修生の資質向上だけではなく、研修で培った人的ネットワークの活用を大切にしていたり、目標に据えていただくことも多く、そのためにも全寮制の研修体系から得る特徴もご理解いただきたい点でもあります。

その事例が、大宮司先生のお話にありましたように、宮城県・山形県・福島県の「宮山福会」・「関東みずのわ会」だったり、全国各地で、研修・講師体験者の交流会が盛んにおこなわれております。この人の輪も研修業務

が生んだ一つの産物です。

私は今後もこの「みずのわ」の繋がりで得た絆を大事にしていきたいと考えております。

橋本 本日は研修センターの業務につきまして、実務に携わっていただきました皆さまの貴重なお話をいただきました。創立50周年を迎え、地方公共団体の共通する利益となる事業を実施させていただく事業団としまして、これからも日本の下水道事業を支えていくと共に研修センターは引き続き、下水道職員の育成を邁進していきたいと考えております。皆さま、どうもありがとうございます。



【左から】

後列：三浦・西村・柏瀬・岡本

前列：梅川・大宮司・渡邊・橋本・片柳

50年の関係者のあゆみ

(元) 兵庫県尼崎市下水道部長
 (元) 日本下水道事業団研修センター研修部助教授

渡邊 克宏

研修部 での 思い出 など

「創立50周年特別記念号」発刊するの
 だと原稿依頼がありました。快く引き受
 け、47年ぶりに研修部での思い出が詰
 まったタイムカプセルを開き、その一部
 を記述させてもらいます。何がともあれ
 日本下水道事業団創立50周年おめでとう
 ございます。心よりお祝い申し上げます。
 「光陰矢の如し」月日の流れは本当に早
 いですね。

私が研修部（研修センターの前身）に
 赴任したのは昭和50年8月1です。

下水道事業センターが日本下水道事業
 団に改組され、研修部も寺小屋時代から
 脱皮した年で施設も開館間もない管理本
 館一棟のみでした。

教授陣は12名1名を除いて派遣職員、
 その内、研修部長を初め6名は東京都下
 水道局からの出向、講師やテキストの原
 稿依頼先も大半が東京都で、当時の研修



部にあつては都の支援は非常に大きな存在でした。

現在の充実された組織体系や施設状況を見ると研修部も随分と成長し発展、充実したものだと親が子供の成長を喜ぶような心境です。

1 発足時の気苦労

着任早々の教授会で貴方の専門は何ですかと聞かれ、何でもやらなければならなかった地方都市出身の私には馴染みのない言葉だったので一瞬戸惑って実務経験の多い管きよですと答えました。以後管きよ担当のコースリーダーとして3年間勤務することになります。

研修は開始されたもののテキストなど教材が不足しており、研修生の手土産はテキストなので各先生方に協力してもらいたいと、実務経験を考慮したテーマで割り当てられ、私は「管きよの事前調査」というテーマでした。

テキストなど書いたことのなかった私には果たして書けるだろうかなど精神的な負担を感じましたね。しかし、避けて通れない状況だったので、周囲の方々の支援を得ながら、実務での経験を主軸に

原稿書を始めました。当時はパソコンもワープロもない時代で原稿書きは大変手間暇が掛かる作業でした。書いた文書を家に持ち帰り家内に文書の流れや誤字、脱字等をチェックしてもらうなど家族ぐるみの取り組みでした。

テキストを書き終えた後のビールの味は格別でしたね。一生忘れることはできません。

また一方、将来に建設大学校構想まで視野にいれて、1200人の計画でスタートした研修でしたが受講生の集まりが悪く初年度は500人程度の実績で終わり大きなショックでした。

この対策としてキャラバン隊の実施、電話作戦での勧誘なども行われ、私も出身母体を初め多少なりとも関わりのあった県、市町村に恥も外聞もなく次から次へと電話をして鯉の一本釣りならぬ「研修生の一本釣り」を行い悪戦苦闘の末、何とか自分のノルマを果たすことができました。

2 果たせた役割

2年の契約が1年延長して在職期間を終え、尼崎市に復帰しました。

研修業務は私にとって大変厳しい一面もありましたが一生懸命熱意を持って努力したことで、それなりの職責を果たすことができたと思っております。

このかいあって、人脈面及び技術的にも精神的にも非常に密度の濃い3年間となりました。私の今日あるのも研修部のお陰であると深く感謝しています。

担当研修生は管きよコースを主体に14コース332人です。

当時は下水道技術職が少ない時代で、受講生も事務職で技術職を担っている方、管理職の職責にある方など責任感の強い前向きでやる気のある研修生が多かったです。

中には日常業務の諸課題を持ち込んで解決して帰りたいという方もおり、これから研修生の期待と要望にこたえるべく夜遅くまで研修生の部屋周りをして受講生が納得いくまで泥臭く意見交換を行ったものです。又、研修生が帰った後もアフタケアとして実務面の相談事にも親身になって誠意と熱意を持って対応しました。

「研修生からお陰様で巧く処理できました」などの連絡には喜びとやりがいを感じたと感じましたね。このケアは研



研修部を離れてからも5〜6年続きました。お陰様で巧く処理できましたなどの連絡には喜びとやりがいを感じましたね。このケアは研修部を離れてからも5〜6年続きました。

3 その後の日本下水道事業団との関わり

尼崎市を定年退職後は日本下水道事業団大阪支社に7年間勤務し、設計審査や再構築などの業務に従事しました。その後、平成22年に研修センターから講師依頼があり、非常勤講師として再び戸田の地に足を運ぶことになり、今日に至っております。振り返ると昭和、平成、令和と3世代にわたって通算15年間研修業務に携わっていることになりました。研修センターとは本当に長い付き合いです。お陰様で平成24年には事業団設立40周年記念で、外部功労者として受賞し感謝状を頂いております。事業団50周年記念の植樹え込み式典にも偶然にも維持管理コースの講義で研修センターに向きましたので参加させてもらいました。

ここで研修部を語るには避けて通れない人がいますので紙面をお借りします。その方は渡邊良彦先生です。先生は私より一カ月早く研修部に着任されています。以後研修業務一筋に現在も現役で幅広く活躍されておられますがその実績に

は頭の下がる思いです。研修部時代から研修生に非常に人気であった先生です。現在は橿原市の観光大使もなされていますが、人脈の広さ、持前の人柄などから先生を象徴する役柄だと思えます。私も事あることにご支援を賜り、研修業務に関われるのも先生のバックアップがあったればこそと心から深く感謝申し上げます。

4 今後への期待

下水道はまるで生き物のように目まぐるしく時代の要請に応じて変貌してきました。これからもどんどん進化していくでしょう。下水道は地球環境の急変や社会情勢変化に応じなければならぬ宿命の施設です。

又、施設の老朽化進行対策や処理水の水循環使用、汚泥の資源エネルギーなども今後の大きな課題です。これらのお観点から今後の下水道界における研修センターの役割は非常に大きいものがあります。研修センターの益々の発展を願っております。

特別講義体験記

特別講義を終えて

宮城県松島町会計課

次 長 大宮司 綾



この度は、下水道事業団創立第50周年、誠におめでとうございます。また、「研 修 み ず の わ」第56号（創立第50周年記念特別号）の発刊、誠におめでとうございます。

下水道事業団の創立50周年という大きな節目の年に寄稿の機会を与えていただき、大変光栄に思っております。奇しくも私自身、今年「知命の年（50歳）」を迎えました！同じ年に生まれた下水道事業団、そしてわたし。内心、年齢は内緒にしておきたいところです

が、寄稿のご依頼をいただいた際、背中を押されたきっかけでもありましたので、ここで皆様にも勇気をもってお知らせいたします（笑）。

歳を重ねていくと、「これまでいろいろな経験が更なる新たな経験へと繋がることがあるものなのだ」と感じます。17年以上も前に研修生の一人として研修センターで研修を受けていた私は、時を経て日本下水道事業団研修センターでの特別講義で登壇することになるとは、全く想像もして

おりませんでした。このような素晴らしい機会を与えていただきました研修センターの皆様、とりわけ渡邊良彦先生に心より感謝申し上げます。

特別講義では、「復興その先を見つめて」〜世界で最も美しい湾クラブに日本で最初に加盟を果たした松島湾〜と題し、松島町の取り組み等についてご紹介させていただきました。宮城県松島町は東日本大震災で大きな被害を受けました。風光明媚な多島海景観を持ち、京都の天橋

立・安芸の宮島と並ぶ日本三景のひとつとして、日本はもとより世界中から多くの観光客をお迎えしてきた本町は、震災により落ち込んだ観光を再興すべく、世界の40あまりの「湾」が名を連ねる「世界で最も美しい湾クラブ（The Most Beautiful Bays in the World）」に日本で最初に加盟をいたしました。特別講義の中では、加盟の承認を得るまでのストーリーや観光振興への取り組み、そして、松島湾が加盟した後には日本国内の湾が続々加盟（富山湾、宮津・伊根湾、駿河湾、佐世保湾）し、国内の湾連携などが生まれたことなどを研修生の皆様にお伝えしました。加えて、世界で最も美しいクラブへの加盟が町民のシビックプライドの醸成にも繋がるようにと観光振興以外の取り組みにも展開していることもお話しさせていただきました。本町では、子ども達が

英語で松島の魅力を紹介する「松島子ども英語ガイド事業」を実施し、本年度の参加者は第6期生にあたります。令和4年度からは、文部科学省指定を受けて教育課程特例校「こども国際観光科」として地域学習と外国語を組み合わせた授業が町内全ての小学校で行われています。今はまだ、東北の小さな町の小さな取り

霊場松島の雰囲気漂う「雄島（おしま）」から見る朝日





祝再開 宮山福会 令和4年10月14日 仙臺屋

組みかもしませんが、将来、大人になって世界で活躍する人材が生まれた時には、もしかしたらこれらの小さな取り組みが子ども達の将来に影響を与えられたのかもしれない、と私自身も喜べる日が来るかもしれません。特別講義は、私が職員として実際に携わった取り組みが主な内容となりましたが、研修生の皆様の心になにかひとつでも留まることが何かあれば幸いです。



仙臺屋駐車場にて

特別講義のために赴いた下水道事業団研修センターでは、全国から集まった研修生の深い学びを応援するために招かれた素晴らしい外部講師の方々にお目にかかることができました。外部講師の方々が、研修生に対し、これまでの豊富な経験や技術を惜しみなく伝授されているお姿に憧れの気持ちを感じました。まさしく「下水道事業の賢者」の勢揃いという感じです。下水道事業の変遷を知り尽くしている賢者の力が、令和の今こそ必要だと思えます。総じて世の中の変化のスピードが加速しており、なんでもボタン一つで済むような便利な物事が増えています。



仙臺屋玄関前にて

きています。うまく機能している時は良いのですが、ひとたび不具合が発生したときには、成り立ちがわからない者がその不具合を対処するのは容易なことではありません。そんな時にこそ、成り立ちや基本を熟知している年長者の皆さんのアドバイスが有り難いですよね。研修センターは、講師の先生方から仕事の基本から様々なノウハウまで、たくさん吸収できる素晴らしい場所です。うまく機能している時は良いのですが、ひとたび不具合が発生したときには、成り立ちがわからない者がその不具合を対処するのは容易なことではありません。そんな時にこそ、成り立ちや基本を熟知している年長者の皆さんのアドバイスが有り難いですよね。研修センターは、講師の先生方から仕事の基本から様々なノウハウまで、たくさん吸収できる素晴らしい場所です。

皆さんとは、コロナ禍によりしばらくお会いすることが叶わないう状態でしたが、今年3年ぶりに開催となり私も参加させていただきました。 「子宝神社」の渡邊良彦先生を中心に、下水道の賢者の皆様はじめ多方面でご活躍

しい場所ですので、全国的向上心ある若い行政職員の皆さんに参加してもらえないと思っております。私も「下水道の賢者」を見習って、若い行政職員のみなさんを応援できるような人間になれるようがんばりたいと思いつきながら帰路につきました。

「子宝神社」の渡邊良彦先生を中心に、下水道の賢者の皆様はじめ多方面でご活躍

最後になりましたが、下水道事業団研修センターを通じて、全国のみなさまに「みずのわ」がますます広がりますようにお祈りしております。またお会いできる日まで、みなさまくれぐれもご自愛くださいませ。

下水道事業団創立50周年 誠にありがとうございます。

さして、話題は少し変わりますが、宮城県・山形県・福島県の研修生OBで結成されている「宮山福会（みやまふくかい）」の皆さんとは、コロナ禍によりしばらくお会いすることが叶わないう状態でしたが、今年3年ぶりに開催となり私も参加させていただきました。

「子宝神社」の渡邊良彦先生を中心に、下水道の賢者の皆様はじめ多方面でご活躍

最後になりましたが、下水道事業団研修センターを通じて、全国のみなさまに「みずのわ」がますます広がりますようにお祈りしております。またお会いできる日まで、みなさまくれぐれもご自愛くださいませ。

下水道事業団創立50周年 誠にありがとうございます。

日本下水道事業団創立50周年 記念植樹を実施しました

日本下水道事業団創立50周年記念行事の一環として、令和4年11月10日（木）に研修センター内で記念植樹を実施いたしました。井上副理事長、渡辺理事のほか、当日、研修センター内で開講していただきました3コースからそれぞれ代表の研修生に参加いただきました。

記念植樹の実施にあたり、初めに主催者であるJSから井上副理事長の挨拶があり、続いて研修生を代表して袋井市の山田寛様から祝辞をいただきました。井上副理事長からは、JSがこの50年で日本の処理場の約7割に関与し、研修生が延べ8万人を超え、日本の下水道事業に貢献してきたことと、これから引き続き信頼される下水道ソリューションパートナーとして地方公共団体を支援していく旨

挨拶されました。山田様からは、50周年を迎えた研修事業への思いとして、このコロナ禍でも工夫して研修を開講している研修センターへの御礼のお言葉をいただくとともに、今回の研修で知識の取得に加え、研修生同士の交流を図っていききたい旨の決意表明もいただきました。

その後、多くの研修生が見守る中、JSのほか、研修生を代表して山田様、笠岡市水田様、美濃加茂市小関様に参加いただき、植樹（イロハモミジ）を実施致しました。研修センター敷地内には、創立10周年ごとに記念植樹が実施されておりまして、それぞれの記念樹は大きく成長しております。創立50周年の記念樹も、JSのこれからの50年を見守りながら成長してほしいと思います。



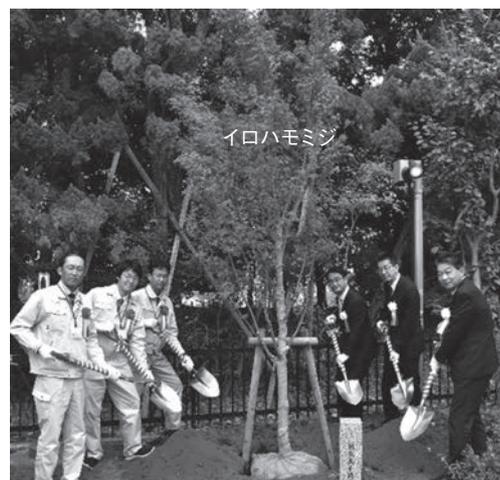
JS50周年記念
植樹報告



井上副理事長挨拶



袋井市山田様祝辞



記念植樹



美濃加茂市
小関様

笠岡市
水田様

袋井市
山田様

井上副理事長

渡辺理事

水津研修センター所長

幹部職員、教授等

9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	R01	R02	R03	R04		
小松原 修義 (東京都)	岩佐 行利 (東京都)	高橋 文行 (東京都)	秋葉 誠 (東京都)						渡邊 良彦(フ)																	稲垣 武司 (フ)	
	桑山 明夫 (フ)		木下 勲(フ)					荒井 俊博 (フ)				加藤 邦彦(フ)							渡邊 良彦(特任教授・フ)								
大村 昇 (横浜市)	久保田 隆久(横浜市)	大浪 渉 (横浜市)					平本 重夫 (横浜市)		石川 眞(横浜市)			中澤 克彦 (横浜市)			福田 勝宏 (横浜市)	本多 大(フ)											
村上 忠弘(フ)		安達 健治(フ)				堀内 健二 (フ)		内村 公省(フ)		松崎 精廣(フ)				太田 秀司(フ)					川島 正(フ)						伊藤 教男(フ)	辻田 威夫(フ)	
																			中村 芳男(フ)								
広瀬 久雄 (横浜市)	渡辺 充(横浜市)	丸山 芳男(横浜市)																									
田村 正明(東京都)	岸 勘治(東京都)	横井 千秋(東京都)							高橋 淳(東京都)																		
	松本 広司(大阪市)	小澤 和夫(大阪市)																									
福島 英雄 (埼玉県)	庄司 利夫 (埼玉県)	鳥飼 定夫 (埼玉県)											濱田 史郎 (埼玉県)	山本 幸治 (埼玉県)	粕谷 直樹 (埼玉県)	佐々木 健太郎 (埼玉県)				早矢仕 高(フ)						行方 馨(フ)	
	高島 正行(東京都)	水口 忠行(東京都)																									
	渡邊 良彦(フ)		東條 光夫(フ)																								
扇原 博(横浜市)	成田 愛世(フ)	下川原 拓也 (フ)	平林 正行 (フ)	渡邊 良彦 (フ)				高瀬 智 (フ)	本多 大 (フ)			太田 秀司 (フ)	石井 宏和 (フ)	遠田 和行 (フ)	高村 和典 (フ)				本多 大(フ)	青木 実 (フ)				横田 敏安 (国)	高村 和典 (フ)	橋本 康弘(フ)	

研修センター歴代

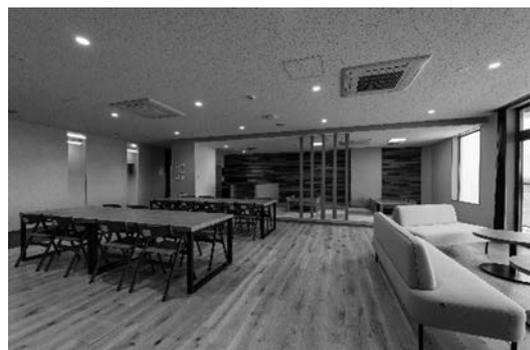
	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	
教授				黒野 良夫(東京都)					高野 稔(東京都)		畑田 晋(東京都)		内山 洋(東京都)		石川 旭(東京都)			河内 康伸(東京都)			中村 益美(東京都)			望月 保(東京都)		
				伊藤 久蔵(仙台市)	木村 慶児(仙台市)		松橋武智雄(青森市)		小沢 治夫(福井市)		石橋 信利(浦和市)		熊井 知次(八王子市)		明石 哲也(フ)			戸邊 貞次郎(東京都)						酒井 勝利(東京都)		
				中村 正雄(東京都・フ)					稲場紀久雄(国)		菊池 正直(フ)			石川 好夫(横浜市)			永野 博敏(横浜市)						増田 保政(横浜市)			
																								弓倉 純一(フ)		
准教授 (助教授)				谷口 尚弘(東京都)	亀田 宏(東京都)		戸邊 貞次郎(東京都)		外崎 克久(東京都)							仙波 久欣(東京都)		佐々木 靖男(東京都)								
				相澤 靖(横浜市)	野口 弘行(横浜市)		多田 實(横浜市)		岡本 文夫(横浜市)		小座間 国雄(横浜市)						石井 吉治(横浜市)		町田 崇(横浜市)							
				菊池 正直(フ)	渡部 剛弥(横浜市)		下村 八郎(横浜市)		浜 武之(横浜市)								吉田 和夫(横浜市)		志村 利夫(横浜市)				中村 英治(横浜市)			
				望月 保(東京都)	岩田 定夫(東京都)		橋場 弘雄(東京都)		和田 直登(東京都)		角田 孝雄(東京都)															
				馬場 靖男(東京都)	土屋 弘(東京都)		関田 光延(東京都)		安彦 四郎(東京都)		実方 敏彦(東京都)						山田 助義(東京都)							萩原 昇(東京都)		
				渡辺 克宏(尼崎市)	中務 幸雄(西宮市)		四井 輝夫(西宮市)												色摩 勝司(大阪市)				高石 享(大阪市)		佐崎 俊治(大阪市)	
				新井 正明(埼玉県)			近藤 雅彦(埼玉県)		船橋 幹夫(埼玉県)		橋本 良之(埼玉県)		伊藤 寿三郎(埼玉県)		兼崎 文雄(埼玉県)		小川 和夫(埼玉県)		斎藤 正裕(埼玉県)					岩井 章(埼玉県)		
									村井 直樹(東京都)		川村 吉晴(東京都)						中村 明人(東京都)		町野 豊(東京都)					鮫島 和夫(東京都)		
							稲場 紀久雄(国)				諸橋 伍一(東京都)														岡澤 邦明(国・フ)	
																	弓倉 純一(フ)									北澤 正彦(フ)
	研修企画 課長		西田 哲夫(国)		伊阪 重(横浜市)	奥田 康(東京都)		佐藤 昭男(東京都)	田中 良治(東京都)	中田 三喜雄(東京都)	小野 保和(東京都)									大塚 将夫(東京都)		今村 加(フ)		桑山 明夫(フ)		

2022年4月から地方公共団体職員・民間技術者の育成支援の新たな拠点として、新寮室棟の運用を開始しました。新寮室棟は寮室が個室とし、研修生のプライバシーに配慮するとともに、女性専用フロア・大浴場を設けるなど女性研修生の生活環境充実に配慮したものとなっています。

新寮室棟の施設紹介

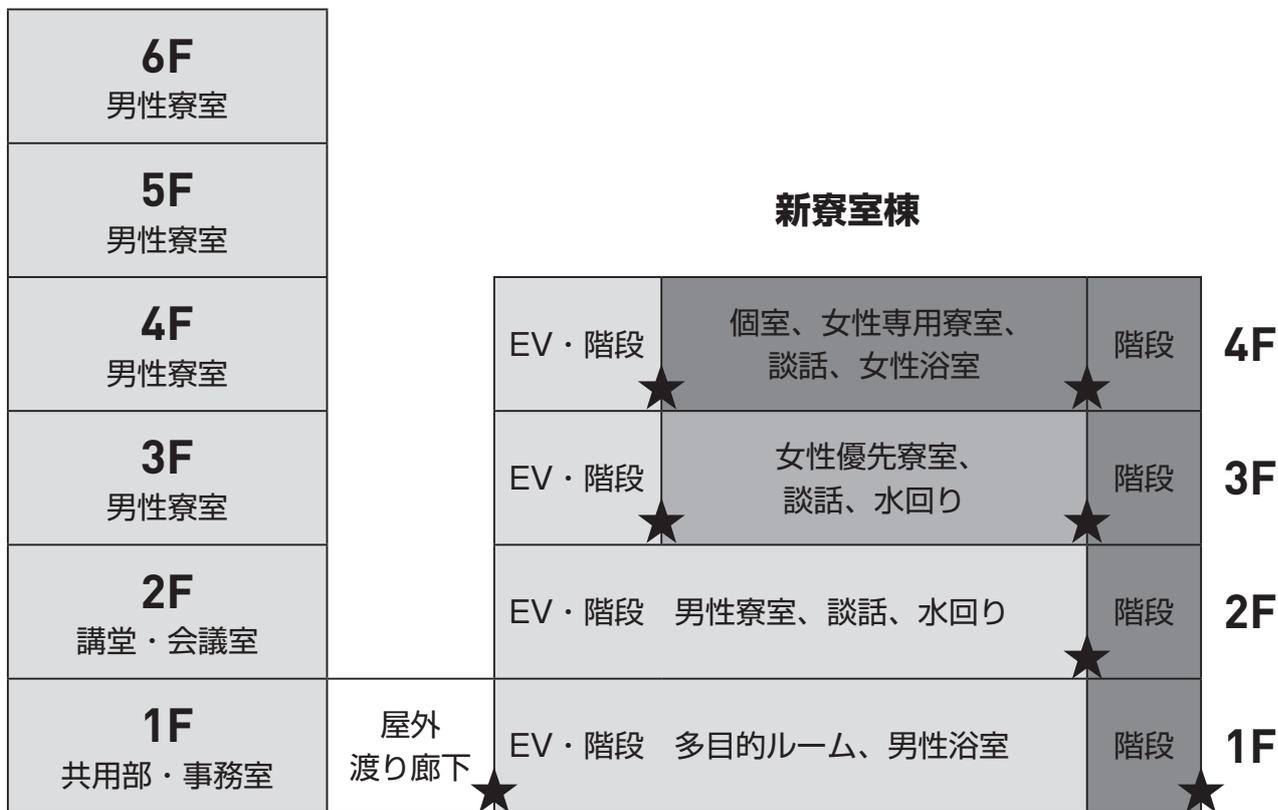


寮室と学習室



談話ラウンジ

管理本館（改修後）



■ 共用エリア ■ 女性優先エリア ■ 女性専用エリア | セキュリティドア ★ 電気錠

建築面積 766.23㎡ (231.78坪)
 延床面積 2,799.60㎡ (846.88坪)
 高 さ 軒高 20.6m
 建 物 高さ 21.20m
 最後部高さ 21.42m
 構 造 鉄筋コンクリート造 地上5階建 免震構造 (球面すべり支承)
 基 礎 既成コンクリート杭 (セメントミルク根固め工法)
 仕 上 げ 外装：複層塗材吹付 屋根：アスファルト防水

日本下水道事業団研修センターの 新型コロナウイルス感染拡大予防対策について

日本下水道事業団研修センターにおきまして、研修生の皆様が研修期間中、安心・安全にお過ごしいただくために、新型コロナウイルス感染防止策を講じておりますのでそのご紹介をいたします。

1. 施設内について

- ・施設内パブリックスペース（エレベーターフロア、研修室入口、食堂入口等）に消毒液を設置しています。
- ・施設内各所（エレベーターボタン、ドアノブ等）の高頻度接触部位の定期的な拭き取り清掃、消毒を実施しています。（なお、エレベーターの表示ボタンにはカバーを貼っています。）
- ・研修センター職員、下水道事業支援センター職員、委託業務全スタッフにマスクの着用を義務付けております。

2. 研修室について

- ・コース開始前の設営時及びコース終了後に研修室の机・椅子の拭き取り清掃・消毒を実施しています。
- ・研修期間中の定期的なドアノブの拭き取り清掃や消毒を実施しています。
- ・マイク、ホワイトボード・マーカー、指し棒、講師用のパソコン等の研修用備品は、定期的な消毒を実施しています。（なお、PCのキーボードには抗菌カバーを貼っています。）

- ・教室は、窓を開けて換気を行い、また空気清浄機、扇風機等の設置により室内循環しています。

3. 寮室（宿泊室）について

- ・寮室の密を回避するため、管理本館棟の寮室については、

2室ある寝室に各1名の収容としています。

- ・コース開始前及びコース終了後に机・椅子の拭き取り・消毒を実施しています。
- ・コース開始前及びコース終了後にベット、ロッカーの拭き取り・消毒を実施しています。
- ・寮室入口ドアノブの定期的な拭き取り・清掃を実施しています。

4. 浴室の利用について

- ・浴室は密を避けるために利用人数を制限し、脱衣直前まではマスクの着用を依頼しております。

5. 食事について

- ・研修期間中の食事は、食堂の指定した席でお願いいたします。

- ・朝食・昼食・夕食ともに個別盛り（定食）スタイルにて提供しています。
- ・ホールスタッフはマスク・手袋等を着用しています。
- ・窓をあけて換気を行い、扇風機等で循環しています。

7. 研修生への依頼事項 について

- 〔持参品〕
- ・マスクの持参（予備のマスクを含む）、マスク回収用のごみ袋、体温計、歯磨き用コップ（洗面所で使用）等
- ※所内の共用部分には、アルコール消毒液を用意しています。
- 〔研修期間中（授業中、寮生活において）〕
- ・マスクの着用の上の受講。
 - ・こまめな手洗い・うがいの励行や入室時の手指のアルコール消毒、室内での咳エ

- ・チケット（ティッシュユなどで鼻と口を覆うなど）などの感染予防策。
- ・講義室等での、マスクを外しての会話、文具の貸し借り、紙名刺の交換を控える。
- ・予め体調について確認の上、発熱、風邪の症状があるなど体調に不安がある場合には受講を控えてもらう。

8. 研修講師への依頼事項 について

- ・講義日の3日前からの検温を依頼。
 - ・下記に該当する場合はJSCコース担当まで連絡を依頼。
 - ・検温時、37.5℃以上の発熱が確認された場合、「咳」、「咽頭痛」の症状がある。
- 新型コロナウイルス感染症陽性者との濃厚接触がある場合。

- ・同居家族や身近な知人に感染が疑われる方がいる場合。
- ・講師が、当日研修センター到着時に検温を実施。
- ・講義中において、マスクの着用を依頼。

9. 所轄保健所との連携 について

- ・対応策を随時確認し、適切な対応をいたします。
- ・体調不良者が出た場合は、所轄保健所と連絡・連携を取り、指示を仰ぎます。



令和5年度 戸田研修(対面集合) 実施計画

コース	専攻名	官民区分	クラス	研修期間	研修回数	受講料(円)
計画設計	下水道事業入門	官	初級	4	1	130,600
	下水道事業の計画の策定・見直し	官	中級	4	2	130,600
	●下水道における浸水対策(浸水シミュレーション演習含む)	官	中級	3	2	119,000
	総合的な雨水対策	官	中級	4	2	130,600
	アセットマネジメント・ストックマネジメント(実務編)	官	特別	4	2	130,600
	下水道事業の広域化・共同化	官	特別	3	1	119,000
	下水道事業における危機管理と災害対策	官	特別	3	1	119,000
経営	消費税(課題解決型研修)	官	特別	3	1	132,000
	受益者負担金(課題解決型職場融合研修)	官	特別	3	2	143,000
	下水道使用料(課題解決型研修)	官	特別	3	1	132,000
	経営戦略(課題解決型研修)	官	特別	3	1	132,000
	●滞納対策(課題解決型研修)	官	特別	3	1	132,000
実施設計	管きよ基礎	官	初級	17	1	226,200
	管きよ設計Ⅰ	官	初級	12	4	198,400
	管きよ設計Ⅱ	官	中級(指)	17	5	226,200
	推進工法	官	中級	10	2	177,300
	管更生の設計と施工管理	官	中級	5	2	142,300
	設計照査(会計検査)	官	中級	5	1	142,300
	排水設備工事の実務	官	特別	4	1	130,600
	●豪雨・暴風・地震災害の対策	官	特別	2	1	66,000
	処理場設計Ⅰ	官	初級	5	1	142,300
	処理場設計Ⅱ	官	中級(指)	12	1	198,400
	処理場設備の設計(機械設備)	官	中級	5	1	142,300
	処理場設備の設計(電気設備)	官	中級	4	1	130,600
	設備の改築更新	官	中級	3	1	119,000
工事監督管理	工事管理	官	中級(指)	12	1	189,000
維持管理	管きよの維持管理	官	初級	12	2	189,000
	管きよの点検・調査	官	特別	5	1	142,300
	処理場管理の基礎	官	初級	4	1	130,600
	処理場管理Ⅰ	官	初級	11	3	189,000
	※処理場管理Ⅱ	一部官民	中級(指)	10	2	177,300
	電気設備の保守管理	官	中級	3	1	119,000
	省エネ法入門	官	初級	1	1	30,400
	※水質管理Ⅰ	官民	初級	10	1	177,300
	※水質管理Ⅱ	官民	中級	5	1	142,300
	事業場排水対策	官	中級	10	1	177,300
	※水処理施設の管理指標の活かし方	官民	特別	2	1	60,700
	※水質管理のトラブル対応	官民	特別	2	1	60,700
官民連携・国際展開	処理場の包括的民間委託における履行確認	官	中級	2	1	60,700
	官民連携	官	特別	2	1	60,700

令和5年度は、宿泊施設として新寮室棟又は本館棟の2施設があり、応募状況によりコースごとに宿泊施設する施設の違が生じるため宿泊費用も宿泊する施設により異なります。

(※女性の研修生は新寮室棟への宿泊となります)

1. 新寮室棟に宿泊する場合：受講料の他に宿泊費として1泊あたり7,000円が必要になります。なお、7,000円には食費1,770円(朝食460円・昼食570円・夕食740円)が含まれています。

2. 本館棟に宿泊する場合：受講料の他に宿泊費として1泊あたり6,500円が必要になります。なお、6,500円には食費1,770円(朝食460円・昼食570円・夕食740円)が含まれています。

3. クラス欄の初・中・特は、初級クラス・中級クラス・特別クラスを、(指)は、指定講習を示します。

4. 「官」のコースは地方公共団体職員のみを対象、「官+民」のコースは地方公共団体職員及び民間事業者を対象としたコースです。

(なお、「処理場管理Ⅱ」専攻は、第1回が「官のみ」、第2回が「官+民」となります。)

5. 各専攻とも申込者が10名を下回る場合には、開催しない場合がありますので予めご了承下さい。

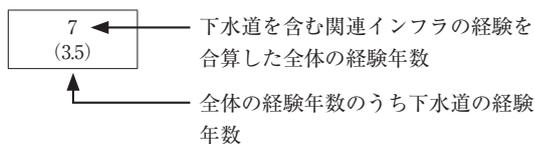
6. 記載の金額については、すべて税込価格です。

●は、新設・リニューアル ※は、官民合同研修

<参考> 下水道法施行令第15条及び同第15条の3に定める資格要件

下水道法施行令第15条及び同第15条の3	(区 分)		(要 件)		資格取得に必要な下水道技術に関する実務経験年数 (注1)			
	卒業又は修了した学校等	卒業又は修了した学科等	履修した学科目等	計画設計 (注2)	監督管理等 (注3)		維持管理	
					処理施設 ポンプ施設	排水施設	処理施設 ポンプ施設	
第1号	新制大学	土木工学科、衛生工学科又はこれらに相当する課程	下水道工学	7 (3.5)	2 (1)	1 (0.5)	2 (1)	
	旧制大学	土木工学科又はこれに相当する課程	—					
第2号	新制大学	土木工学科、衛生工学科又はこれらに相当する課程	下水道工学に関する学科目以外の学科目	8 (4)	3 (1.5)	1.5 (1)	3 (1.5)	
第3号	短期大学	土木科又はこれに相当する課程	—	10 (5)	5 (2.5)	2.5 (1.5)	5 (2.5)	
	高等専門学校							
	旧制専門学校							
第4号	新制高等学校	土木科又はこれに相当する課程	—	12 (6)	7 (3.5)	3.5 (2)	7 (3.5)	
	旧制中等学校							
第5号	前4号に定める学歴のない者	—	—	—	10 (5)	5 (2.5)	10 (5)	
第6号	新制大学の大学院	5年以上在学 (卒業)	下水道工学	4 (2)	0.5 (0.5)	0.5 (0.5)	0.5 (0.5)	
	新制大学の大学院又は専攻科	1年以上在学	下水道工学	6 (3)	1 (0.5)	0.5 (0.5)	1 (0.5)	
	旧制大学の大学院又は研究科							
	短期大学の専攻科	1年以上在学	下水道工学	9 (4.5)	4 (2)	2 (1)	4 (2)	
	国土建設学院	上下水道工学科	—	10 (5)	5 (2.5)	2.5 (1.5)	—	
	外国の学校	日本の学校による学歴、経験年数に準ずる。						
	指定講習	国土交通大学校	専門課程下水道科研修	—	—	5 (2.5)	2.5 (1.5)	—
日本下水道事業団		下水道の設計又は工事の監督管理資格者講習会	—	—	5 (2.5)	2.5 (1.5)	—	
		下水道維持管理資格者講習会	—	—	—	—	5 (2.5)	
第7号	日本下水道事業団法施行令第4条第1項に定める技術検定	第1種技術検定合格	—	5 (1.5)	2 (0.5)	1 (0)	—	
		第2種技術検定合格	—	—	2 (0.5)	1 (0)	—	
		第3種技術検定合格	—	—	—	—	2 (0)	
第8号	技術士法による本試験	科目として下水道を選択し水道部門に合格した者	—	—	0 (0)	—	0 (0)	
		科目として水質管理又は汚物処理を選択し衛生工学科部門に合格した者	—	—	—	—	0 (0)	

(注) 1 表記例



<関連インフラ>

- ・計画設計及び実施設計・工事の監督管理の場合
～下水道、上水道、工業用水道、河川、道路
- ・維持管理の場合
～下水道、上水道、工業用水道、し尿処理施設

2 「計画設計」とは、事業計画に定めるべき事項に関する基本的な設計をいう。

3 「監督管理等」とは、実施設計 (計画設計に基づく具体的な設計) 又は工事の監督管理 (その者の責任において工事を設計図書と照合し、それが設計図書の通りに実施されているかどうかを確認する事。) をいう。

研修センターの歩み

平成4年	4・1	第9代本部長 清野 圭造就任	昭和47年	11・1	下水道事業センター発足 初代研修部長 岩崎 保久就任
	4・1	第11代研修部長 星隈 保夫就任			
	11・1	事業団設立20周年を迎える	昭和48年	2・6	研修部で研修開始
平成5年	7・1	常任参与 北井 克彦就任		5・	プレハブ校舎完成
				12・27	試験研修本館着工
平成6年	7・1	第10代本部長 小林 紘就任	昭和49年	1・16	研修会報（研修みずのわ）創刊
	10・7	研修修了生2万5千人達成		12・1	第2代研修部長 丸山 速夫就任
平成7年	7・5	総合実習棟竣工	昭和50年	3・25	試験研修本館竣工
平成8年	4・1	第12代研修部長 竹石 和夫就任		4・16	初代試験研修本部長 池田 一郎就任
平成9年	3・20	本館改修工事竣工		8・1	日本下水道事業団発足 第2代本部長 岡崎 忠郎就任
	9・29	研修修了生3万人達成			
	11・1	事業団設立25周年を迎える	昭和51年	3・14	第1回下水道技術検定試験実施
平成10年	7・14	第11代本部長 黒沢 宥就任		8・1	第3代研修部長 橋本 定雄就任
	8・1	参与 内田 信一郎就任		11・21	第2回検定試験実施（以後毎年11月中旬実施）
平成11年	4・1	第13代研修部長 大嶋 吉雄就任	昭和52年	2・16	第3代本部長 上田 伯雄就任
平成12年	6・30	研修修了生3万5千人達成		4・1	第4代研修部長 武田 篤夫就任
	7・3	第14代研修部長 渡部 春樹就任	昭和53年	4・1	第4代本部長 遠藤 文夫就任
平成13年	1・20	第12代本部長 中橋 芳弘就任		11・16	常任参与 安田 靖一就任
	4・16	参与 福智 真和就任	昭和54年	6・9	第5代研修部長 野端 利治就任
平成14年	4・1	第15代研修部長 篠田 孝就任	昭和55年	10・1	第5代本部長 卜部 壮一就任
	11・1	研修修了生4万人達成 事業団設立30周年を迎える	昭和56年	3・31	研修修了生（延べ）7,603人となる
平成15年	4・16	参与 色摩 勝司就任	昭和57年	6・5	第6代研修部長 伊阪 重信就任
	10・1	「特殊法人整理合理化計画」に基づき、 日本下水道事業団が地方共同法人となる		11・1	事業団設立10周年を迎える
平成16年	4・1	機構改革により「研修センター」発足 第16代研修センター所長 大嶋 篤就任	昭和58年	4・1	常任参与 藤井 秀夫就任
				8・29	研修修了生1万人達成
平成17年	4・1	第17代研修センター所長 成田 愛世就任		11・16	第6代本部長 中村 瑞夫就任
	8・1	第13代本部長 安藤 明就任	昭和59年	4・12	試験研修本部を技術開発研修本部 に名称変更する。
	10・21	研修生4万5千人達成	昭和60年	1・1	第7代研修部長 真船 雍夫就任
平成19年	4・1	第18代研修センター所長 高島英二郎就任		3・27	新厚生棟完成
	11・1	事業団設立35周年を迎える	昭和61年	10・1	第7代本部長 苦米地 行三就任
平成20年	1・19	研修修了生5万人達成	昭和62年	3・31	研修修了生（延べ）14,311人となる
	1・30	研修修了生5万人達成記念行事開催	昭和63年	1・1	第8代研修部長 石川 廣就任
平成21年	7・14	第19代研修センター所長 藤生 和也就任		4・1	第8代本部長 千葉 武就任
平成22年	4・1	第14代本部長 村上 孝雄就任	平成元年	9・1	常任参与 村上 仁就任
	4・22	研修修了生5万5千人達成	平成2年	3・31	本館改修工事竣工
	6・10	本館耐震化工事着手		6・11	第9代研修部長 亀田 泰武就任
	8・3	研修業務検討委員会設置	平成3年	7・16	第10代研修部長 石川 忠男就任
	3・11	東日本大震災		7・26	研修修了生2万人達成

平成23年	4・1	機構改革により技術開発研修本部長を廃止し、研修・国際担当理事を設置。 初代理事 村上 孝雄就任
	9・21	臨時研修「地震対策」実施
平成24年	4・17	研修修了生60,000人達成
	11・1	事業団設立40周年を迎える
	11・22	臨時研修「放射能対策」実施
	3・29	本館耐震化工事終了
平成25年	4・1	第20代研修センター所長 藤本 裕之就任
	11・1	第2代研修・国際担当理事 野村 充伸就任
平成26年	4・1	第21代研修センター所長 花輪 健二就任
平成27年	11・1	第3代研修・国際及び西日本担当理事 畑田 正憲就任
平成28年	4・1	第22代研修センター所長 細川 顕仁就任
	7・1	研修修了生70,000人達成
平成29年	10・4	新寮室棟基本設計着手
	11・1	事業団設立45周年を迎える
平成30年	3・16	新寮室棟基本設計完了
	4・1	第23代研修センター所長 松村 弘之就任
	5・22	新寮室棟詳細設計着手
	8・21	研修修了生75,000人達成
令和元年	9・27	新寮室棟詳細設計完了
	11・1	第4代研修・国際担当及び東日本担当理事 畑 惠介就任
	11・30	新寮室棟（仮称）着工
令和2年	2・13	研修修了生80,000人達成
	4・1	第24代研修センター所長 水津 英則就任
令和3年	11・1	第5代研修・国際及び東日本担当理事 渡辺 志津男就任
令和4年	4・1	新寮室棟供用開始
	11・1	事業団設立50周年を迎える



研修を支えるスタッフ



【左から】（研修企画課）

最後列：正田・仲神・川崎・宗川（別撮：本多教授・行方准教授・栗田専任講師）
 中 列：石川・大鹿専任講師・青木教授・三浦研修企画課長代理・佐々木・田中
 最前列：辻田教授・渡邊特任教授・橋本研修企画課長・水津研修センター所長→
 高村審議役・稲垣教授・加藤教授



【左から】（管理課）

後列：小松・西田・原嶋
 前列：羽座川・黒崎次長・荒木



下水道事業支援センター
戸田支部



食堂
(富士食品商事(株))



ビソー工業(株)
(庁舎管理)



ビソー工業(株)
(清掃)

研修センターの研修業務にご協力いただいている皆様



4階デッキから見える風景



多目的ルーム前



パウダールーム



多目的ルーム

研修センター 新寮室棟



男性浴室



談話ラウンジ



学習室



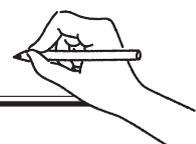
寮室

編集後記

新型コロナウイルス感染症の状況が一進一退する中ではございますが、当センターでは、感染防止策を取りながら対面型研修を着実に実施している状況です。昨年度よりオンライン研修にも取り組んできたところですが、今年度からはオンデマンド研修もスタートさせ、皆様の様々なニーズに応えることができるよう、今後とも努めて参ります。

本号は、日本下水道事業団創立50周年特別記念号として発刊をさせていただきました。本号への執筆者をはじめ、歴代の研修生の皆様、研修センターの研修業務にご協力を賜りました皆様には、厚く御礼申し上げますとともに、これからもご指導・ご鞭撻のほど、何卒、よろしくお願いいたします。

研修企画課
課長代理 三浦 英和



「みずのわ」の名前の由来

滑らかな水面に落とした一滴のしずくがつくる小さな輪が大きく広がる様から、研修生の輪が一人から全国へ、一都市から全国の都市へと大きなつながりが生まれるように、との期待を託したものです。



機関誌「研修みずのわ」創立50周年特別記念号

令和5年1月発行 創立50周年特別記念号

発行 地方共同法人 日本下水道事業団 研修センター
〒335-0037 埼玉県戸田市新笹目5141
TEL 048-421-2692
FAX 048-422-3326
印刷 株式会社石井印刷